

戦中・戦後の子どもの視点からの オーラルヒストリー 仲本 實 氏

岐阜女子大学

「沖縄おっらい」

目 次

1. 昭和13年～15年ごろの生活

- (1) 旧大里村字平川での生活
- (2) 昭和15年4月大里村立第二小学校に入学
- (3) 父親は名古屋に出稼ぎ 叔父に預けられる
- (4) 昭和16年4月 山田小学校に転校（二年生）

2. 戦争近づく

- (1) 泊小学校に転校（4年生）
- (2) 戦時色強まる
- (3) 上官はよく部下を殴った

3. 最初の爆音

- (1) 戦争は負ける
- (2) 内地疎開始まる

4. 再び山田国民学校へ

- (1) 山田国民学校
- (2) 朝倉さんとの出会い
- (3) 対馬丸が沈んだ噂
- (4) 昭和20年10月10日の空襲

5. 昭和20年地上戦始まる

- (1) 敵機の飛来激しくなる
- (2) 2月19日3人目の妹生まれる

岐阜女子大学「沖縄おっらい」

戦中・戦後の子どもの視点からのオーラルヒストリー 仲本實氏

6. 4月1日米軍上陸

- (1) 父親が整備してくれた防空壕チビチリジャクの自然の洞窟
- (2) 父との別れ
- (3) 神風特攻隊が来る
- (4) 最初の犠牲者
- (5) 米軍との出会い

7. 家族は難民収容所へ

- (1) 従兄とわたしが捕まる
- (2) 家族との別れ

8. 山中での暮らし

- (1) 山に残った人々
- (2) 兵隊や防衛隊から帰って来た若者たち
- (3) 吸殻探し

9. 米兵の態度がだんだん険悪になる

- (1) 二人の日本兵殺される
- (2) 母との再会
- (3) 父親を殺された一家
- (4) 恐ろしい目に遭う
- (5) 米兵による婦女暴行
- (6) 二人の兄弟殺される

10. 石川難民収容所へ

- (1) 米兵の態度険悪になる

1 1. 石川難民収容所と終戦

- (1) 石川難民収容所の状態
- (2) 学校の始まり

1 2. 城前初等学校から宮森初等学校へ

- (1) 石川市城前小学校の沿革史によれば
- (2) 終戦の日を知らない

1 3. 宮森初等学校時代

- (1) 学校の様子

1 4. 家族と一緒に暮らせるようになる

- (1) 昭和21年8月に山田村に帰ることが許された
- (2) 父の消息を探す
- (3) 蘇鉄地獄
- (4) 山田小学校開校 山田小学校創立百周年誌を見ると

1 5. 飛び級して高等学校に入学

- (1) 高等学校入学

1. 昭和13年～15年ごろの生活

(1) 旧大里村字平川での生活

仲本先生

今日はね、私のちっちゃいころの、戦中戦後といいますが、そのころの、お話をしてみたいと思います。

昭和13年から15年ごろの生活なんですが、そのころ大里村のね、平川という村に生活してたんですよ。そこで、父がバスの運ちゃん、母が幼稚園の先生をしてたんですね。

で、その父の仕事というのは、その那覇から糸満までの、軽便(けいびん)鉄道があったの。ところがね、東海岸側からこの鉄道まで、うんと遠いの。遠いもんだから、その稲嶺駅というところから、その遠い、要するに東海岸側を回って東風平駅まで、お客さんを拾っていく。そして、鉄道に乗っけるという仕事ですよ。だから、当時は県鉄バスと言っておったと思います。県鉄バスね。

そこではもう、かなり面白いことをやっていますね。自由に遊んでます。例えば、空気銃を持って、おやじと一緒にこう、小鳥を撃ちに行ったり、そんなのが、いま思い出されますが。それから、学校をのぞいたり、それから、母が、幼稚園の子どもを教えるところを、まあ、幼稚園というよりは保育園でしょうね。その保育園の子どもと、お遊戯をしてるのを見ておったりとか。

一番面白いのは、どっちかという、結局ね、その稲嶺駅から東風平駅までのバスが1台しかなかったんですね。そうすると1台ということは、その運ちゃんは全部うちのおやじさんなんだよね。道路運ちゃんはね。それで、よく途中で待ち受けて、手を挙げて乗るんですよ。そして一日中、要するにドライブと、しゃれこんでおったんです、おったんですが、そんな感じで、まあ、やったり。

それから、当時からですね、よくサツマイモを炊いたですね、幼稚園卒業し、幼稚園くらいです。まだ小学校へ上がる時分から、私たちのころでは、何か、薪を集めてきて、それでサツマイモを炊いて、食事にするという、その辺は手伝っておったということなんでしょう。そんなことで、わりと幸せに、暮らしとったんじゃないかなと。

そして、たまにこう那覇に出るんですよ。那覇に出るとき汽車に乗るんですがね、大人の人を見てると、汽車が止まらんうちにふっと飛んで、飛び降りて、走ってこう行くんですよ。それをまねしてね。で、ひっくり返って、おやじやおふくろ、それから駅員さんを心配させたこともあります。

1. 昭和13年～15年ごろの生活

(2) 昭和15年4月大里村立第二小学校に入学

仲本先生

まあ、ところがですね、そうしてるうちに結局、小学校の入学時期になるわけですね。それで、その当時ですね、大里村の第二し、大里という、第二小学校でしょうね。大里村立第二小学校ということだと思います。まあ、そこに入学するわけです。

そこでは、上級生にもうんとかわいがられまして。なぜかという、足が速かったんですね。すると、運動会になりますと、各村のリレーの勝負があるんですよ。その1年生の選手としてね、よく鍛えられておったんですが。

1. 昭和13年～15年ごろの生活

(3) 父親は名古屋に出稼ぎ 叔父に預けられる

仲本先生

おやじさんが、結局、仕事を変えるんです。仕事が変わったために、名古屋へ行くんですね。名古屋に出稼ぎに行くんですが、そのために私たちはまた那覇に出て行って、そして私は叔父に、預けられるんですね。すると、母やきょうだいたちは、また別のところで暮らしておって、叔父のところではね、その叔父と、その祖母、私と3名で暮らしていたんです。

叔父は、とても教育熱心で、よく教えてくれたりしたんですが、ちょっとまずいとね、特に成績がまずいと「手を出せ」ってやるんですよ。その手もね、「ここがじゃない、ここじゃ」ということで、裏のほうをたたくんだな。ええ。そして、毎日そこに、たたくむちがあるわけじゃないから、「おい、おまえ、むち探してこい」と。ということで、自分で探しに行って、こう打たれるんですが、まあ、そんなこう、暮らしをしていましたよ。

それで、うーん、それでもね、その叔父さんは、普通は遊びに連れていったりして、とても優しい人だったんで、そのように暮らしていたんですが。

どうしたのかね、学校へ行くのも嫌いなんですよ。そのころ。1年生から2年生の初めにかけてですけれども、学校へ行かないで、いまで言う山学校。要するに学校をサボるわけです。

サボったらどうするかというと、私のうちの前に、焼き釜があった。壺屋のが、焼き釜があってですね、そこに、サツマイモを持って行って焼いて食べたりなんかして。それから、冬はあったかいんですね、そこは。うんとあったかいから、そこで暮らしたり。

それから、ほかの同級生が帰ってくるころになると、いまのね、あの桜坂の、あの墓地地帯がありますね。そこへ行くんですよ。そこへ行ってね、そこにあのマッコウーという、つぶすとね、紫色のあの、あれが出るのがあります。これを顔に塗ったりしてね。要するに、南洋の原住民だということだね、そこで遊んだり。

それから、墓地がありますんで、デレンとこうやりますとね、飛び降りると見えなくなるわけでしょう。そうすると猿飛佐助だ。そんな遊び方とかね。

1. 昭和13年～15年ごろの生活

(4) 昭和16年4月 山田小学校に転校（二年生）

仲本先生

それから木登りとか。木登りはよくやりましたね。たまには折れて落ちたりしましたけれども。そんなことで、遊んで。

で、うち帰るときはこう、ちゃんと落としていくんですよ。顔は、それは落としていくんですが、叔父は帰ってきて、あ、この野郎、今日は行かなかったなっていうのが分かるわけ。

そして、今日行かなかったでしょうということで、また怒られて、「よし、手出せ」といって、またやられたりしたんですが。そんなことを繰り返しながら、小学校1年生と2年の最初のころは、やってみました。

それから、母が、やっぱりね、田舎の生活は難しいんで。子どもをたくさん連れてるんでね山田に帰ろう、要するに田舎に帰ろう、実家に帰ろうということで、山田に行くんですよ。そして、その小学校に転校していきます。山田小学校に。そのころ2年生の、中ごろだったと思いますが。

そうするとね。ああ、ごめんなさい。その前は、要するに、私がよく、学校をサボった時期はね、要するに1年生、2年生の初めは久茂地小学校。那覇のね、久茂地小学校。

そっから山田に転校するわけですが、久茂地小学校でも山田小学校でも、友達非常に多くてですね、よくかわいがられたんですよ。

それと、よくあの、畑仕事。例えば田んぼ耕したり、畑を耕したり、あるいはね、ウシ、ウマの草を刈ったり、そういったことをさせ、やったんですね。すると、自分一人では行けないから、やっぱり友達す、そろってこう、行くわけです。

そのときに、あの、友達はね、慣れていきますんで早いんですよ。草刈ったりね、田んぼ耕したりするの早いんですが、私は、そんなことやったことないから、もう一番遅いわけ。みんなが一緒、もう担げるだけ、こう草を刈りますと、私のはまだこれぐらい。それで、みんなで刈ってくれたりね。

2. 戦争近づく

(1) 泊小学校に転校（4年生）

仲本先生

それから、いとこ兄がいたんですが、5歳ほど年上だったんですがね。その人が、特に私の手伝いをしてくれたんです。だからその兄貴と、畑行ったり田んぼ行ったりするのはとてもうれしくて。というのは、楽でしょう。草刈りに行ったりすんのもね。その兄貴といつもくっついていたんですが、非常にお世話になった兄貴なんですね。

それから、今度、名古屋から、おやじが帰ってくるんです。帰ってきたら、今度また那覇に住み着くんですね。住み着いたら、結局、その山田の小学校から泊の小学校に、また転勤するんですね。そのときがちょうど4年生で。

泊に行きますとね、ところが、泊の子どもたちは、かなり乱暴なんですよ、みんな。久茂地小学校とか山田小学校では、ほとんどけんからしいけんかはなかったんですが、この泊小学校に来たらね、このけんかの順番が決まるまで、毎日けんかなんですよ。転校生来たら。ですから、いつもけんかばかりやってる。いつも負けてるわけにいかないんでね、仕方なくけんかをするんですが。

ところが、田舎あたりではね、平手打ちなんですよ、だいたい。ところが、この泊来ますとね、空手のこぶしなんですよ。こぶしで、こう「君、僕に勝てるか」と、こう来るわけですよ。そらそうすると、勝てそうだったら「うん」と言うわけ。そうするとね、教室の裏へ行っけんかするわけですよ。負けそうだったら「いいや」と言うわけ。これで順番決まっていくわね、こういうふうにして。ええ。

ところが、私はあの、田舎から来てるもんで、要するに、こぶしで人を殴るということを知らない。みんな、この平手でやってるわけですね。ところが、泊の子どもたちはね、こぶしで来るんですよ、空手みたいに。もともとその泊というところは、空手の盛んなところでして、やっぱりそのせい、影響もあったかもしれませんが、このこぶしで来るんですね。

で、自分から飛びかかっていくわけにいかないから、いつもぼけっと、こう見ていると、「けんかするか」って言ったら「うん」と言ってるんだが、ほんとに自分がけんかしたいわけではないわけだ。だから、ぼけっとしているときに、バシッとやられるんですよ、一発。ええ。これでね。

(続) (1) 泊小学校に転校(4年生)

仲本先生

やられると、があんとして、目から火花が散ると、すぐ飛びかかっていくわけです。そのときに飛びかかって、けんかするわけですが。私は小さいけど相撲は強いほうだったんで、だいたい、上に乗っかってやっていました。それでけんか勝ったとか。

でもね、勝っても、ここのほおは、いつも真っ黒なんですよ。殴られたあとで。学校から、から帰ってくると、また今日もやったなといって、よく笑われたんですが。父や母には笑われたんですが。

ところが、負けて泣いてくるときは、そののね、安里川というんだ。1番のこの崇元寺橋というのがありますね。その崇元寺橋に下りてですね、顔を洗って、その涙の跡をふいてから、うち帰るんです。そのまま行くと、父に怒られますんでね。

で、私のうちがね、この写真の隅っこのほうのね、ここにあったんです。大潮のときは、門まで来るんですね。門まで潮水が来て、そこにあの板を掛けたり、あるいはあの芭蕉ですね。芭蕉のあの実があるでしょう。実じゃなくして、何ていうの、あれ。芭蕉の幹だな。それを浮かべて、そっから泳いでいくんだよ。そして、ここでよく泳いだんですが。

その向かい側に昭和高等女学校という女学校がありましてね。そのお姉さんたちは、よくいたずらしてたんですね。その学校はあんまり、その当時、評判よくなかったんで、よく悪口を言ったりしては遊んでおったんですが。

ところがね、まだ私の耳に残ってるのは、この女学校の生徒がね、朝晩、ああ、朝、特に朝会の時間に、『海行かば』だとか、たぶん校歌だと思うんですが、歌ってるんですよ。きれいな声で。それがね、いまで言う、結局、二部合唱とか三部合唱で歌ったんじゃないでしょうかね。すごくきれいなハーモニーで聞こえてくるんですね。

これだけは、私の耳の中に現在でも残ってるんです。これが私の音楽の好きな、要するに合唱の好きな子になったんじゃないかなと。その原因がね。

普通はしかし、この姉さんたちを、あの、何か悪口を言いながらいじめてたわけですけども。そんなことがあったりしましてね。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

(続) (1) 泊小学校に転校(4年生)

仲本先生

だいたい子どもたちは、こっから始めるんですよ。この中間ぐらいから。飛ぶのは。それで飛べたら、今度は、逆飛び込みをするわけですね。

それから1段上がってって、ここ。ここ行って、こっから飛ぶ。と、それができたらまた逆飛び。それから、もっとできるようになったら、ずっと、とんがったのがあるんですよ。欄干のね。そこの上に乗って、そっから飛ぶんですよ。

で、私は、飛ぶのはこの辺からできたんですが、逆飛び込みはこっからできなくて、こっから、よく逆飛び込みをしておったんですが。当時は非常に深くて、下に足が着いたりすることはなかったんですが、こういうにして、この写真みたいな、非常に干潮の場合と、場合にはね、やっぱり着く場合があるんですよ。

私の友達が、こっから逆飛び込みをしたらね、額に刺さったんです。竹が。刺さってね、けがをしまして、そのけがが治ったらね、カタカナのメの字に似ていたんです。

そしてこの、この人のあだ名を「メ太郎」といったんですが。そんなことがあったりして、ここは非常に、楽しいところでもありました。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

2. 戦争近づく

(2) 戦時色強まる

仲本先生

しかしね、そのころから、要するに私が4年生になったころから、兵隊がたくさん来るようになったんです。

兵隊が来るようになって、そして、その兵隊は、もうものすごく忙しいんですね。まあ敬礼が素晴らしいし、それから歩くのも、歩調取れで歩いたり、あるいは、普通は駆け足で走ってるんですね。特に、お風呂に行くときには、われわれよく会ってるんですけども、駆け足で行くんです。

風呂の中ではどうするかというと、だいたい二人一組になって、背中をふいたりね、さすったりして、ものすごく早いんですね。だいたい5分か10分間では、わっと出ていったんですね。兵隊はそんな時代でした。

2. 戦争近づく

(3) 上官はよく部下を殴った

仲本先生

ところが、逆に今度はですね、今度は殴られたのはよく見るんですよ。もう上官がね、自分の部下を、ばんばん、ばんばん殴ってるんですね。それがやっぱり平手打ちじゃないんですね。こぶしで殴っていました。それを見るとね、非常に「何で、自分の部下なのにな。友達だろうな。」と思いながらも、何となく憎いなとかたちで思っておったんですが。

ある日ね、沖縄の人でね、軍医がおったんですよ。軍医の中尉だったか大尉だったと思うんですが、この方がやっぱり部下殴ってるんだよ。沖縄の人だから、ものすごく僕からすると尊敬の目で見てるわけね。ところが、部下を殴ったもんだから、大嫌いになったことがあるんですけども。そんなことがあったりして過ごしました。

3. 最初の爆音

(1) 戦争は負ける

仲本先生

そのうちに、戦争が激しくなるんですね。そうすると、ちょうど、おやじがですね、父親はその那覇じゃなくして、那覇分廠（ぶんきゅう）というところの軍属なんですが、それがですね、飛行場の仕事をしていたんです。それで読谷飛行場に、よくそっから通って、運転手として通ったんですが、そのせいでしょうか。この兵隊さんの将校たちが、よく酒を飲みに来るんですよ、夜は。

おやじはよく酒を飲んでおったんですけども、私たちは隣の部屋に寝てる。そうすると、その話がみんな聞こえるんですね。寝てるところに。その中で、ある将校さんが言ったことが、「仲本さん、今度の戦争は負けだよ」と。という話をしていたんです。

で、私は寝ておってそれを聞いたんで、あら、戦争が負けるっていうことがあるのかなと。その当時は、戦争が負けるということはどういうことを知らないんですね。知らないんだが、戦争は負けると。と言って、二人しばらく黙っていたんです。

それからまた、ぐずぐずぐずぐず小さな声で話をしていたんですが。まあ、こんなことがあったりしましてね。

3. 最初の爆音

(2) 内地疎開開始まる

山里先生

ある日、学校へ行きましたらね、内地のほうに疎開をしなさいというんだ。要するに、ここにおると、ここはたぶん戦場になるだろうと。沖縄は戦場になると。そうすると、そこに女や子ども、年寄りがあると、戦争のじゃ、兵隊さんの邪魔になると。だからなるべく、本土に疎開をしてくれという話を先生から聞いたんですね。

私は、本土はあこがれてるわけですよ。内地に行くのは、すごくあこがれてるわけですから、うちに帰ったら父や母に、うんと話をしたんです。そして、「ぜひ行きたい」と。「ほんとに行きたいのか」「いいや、絶対に行く」ということで、言ったんですよ。

そしたら、父も母も、この際だから、やっぱり疎開さしとったほうがいいんじゃないのかなということだね。私とすぐの妹がおったんですが、この子と二人で、じゃあ疎開しなさいということで、リュックサックに缶詰めやら、特にスルメとかね。それからガーゼ、それから傷薬、包帯とか、ま、そういったのをリュックに詰めまして。それから着替え。

それから、もう一つはね、縄をね、10メートルの縄、決まっとったんですが、10メートルの縄をこういうふうに分けて、こうくるくると巻いて、投げたら外れるようになってとったんですよ。それをここに、その、腰に下げていくようにということで、これも準備していたんです。

その縄は何するかというと、やっぱり船が沈んだりすると、友達をこれで投げて助けたり、あるいは、そのいかだが浮いてると、そこに自分をくくりつけたりするための縄なんです。まあ、こんなして準備をしていたんです。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

(続) (2) 内地疎開始まる

仲本先生

ところが、そのころからですね。いつのころかよく覚えてないんですが、要するに疎開の話の出たときでしょう。その後ですね。泊の小学校は兵舎になってるわけです。そして学校の生徒はね、あちこち散って、区の事務所あたりで勉強してるわけです。

その区の事務所で勉強をしているんですけども、ある日ね、どうしたのか、意味はよく覚えてないんですが、4、5名にたたかれたんですよ。そこには例の泊小学校で、ボスがいたんですが、そのボスに誰も勝てないんですよ。

けんか、勝つにしても、この人には勝てない。なぜかというところ、青年がつながってるんですね。お兄さんが。この人をいじめると青年が出てくるんですよ。だから、この人を怖がって、誰も手出さない。

で、私もこの人怖かったんで、4、5名に殴られて殴られるままにしておったんです。しまいには泣き出したんですが。そして、考えたんですよ。一人一人は勝つのにあと。うん。一人一人は勝つのにあとと思っておったんですが、それでももう殴られて、泣いて帰ったんです。

そこ、帰りながらですね、こんなこと思ったんですよ。この子たちと疎開を一緒にすると、親も誰もいないところでいじめられはせんかなと。ということ、泣きながら、うちに帰りながら考えたんです。それで、うち帰るまでには、もう決まっちゃった。よし、もう行かん。この子たちとは行かんということを決めてですね、その晩、父と母に「僕は行かない」と、だだをこねてるわけです。

父も母も最初はね、「どうしたんだ。おまえ、自分で行きたいって言ったんじゃないか」ってやったんですが、「いや、行かない」と言って、もうとにかく強硬に反対してるわけですよ。自分でね。そういうことをやったもんですから、長男というのはですね、普通は優しいんですよ。優しいというよりはおとなしいんですよ。

親の言うことをよく聞くんですよ。ところがね、その日に限って僕、聞かないわけ。それでおやじもおふくろも、あら、これはおかしいぞと。沖縄が戦場になって死ぬんだったら、じゃあ家族一緒がいいんじゃないか。そんならね、じゃあ行かんていいよと。死ぬなら一緒だよということで、行かないことに決めた。その代わり、すぐ私たちは、私、山田の小学校にまた行ったんですよ。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

4. 再び山田国民学校へ

(1) 山田国民学校

仲本先生

そのころは当然、前の泊小学校というのも、泊国民学校ですね。それから、いまの山田小学校というのも山田国民学校ですね。そこに行ったんです。そこに行きますとね、まあ友達が、前の友達がたくさんいますんで、また楽しく草を刈ったりね、遊んでおった。

ところが、その学校も、兵隊が兵舎として使ってる。子どもたちはやっぱり、事務所あたりで勉強してるんです。その代わり、そんなに勉強するんじゃなくてね、もっこを担いでね、壕掘りの手伝いをしてるんですよ。土を出したりね。

それから、かまを持って行ってね、あの樺木ありますよね。防空壕を支えるね。これの皮はぎ。皮をはいだりね、そういった仕事を私たちはやっていた。そんなことで、あんまり、勉強というものはやってなかったんですが。

そしてね、山田の部落には、二つの部隊が駐屯していたんです。山部隊というのと、球（たま）部隊。二つの部隊が駐屯しておって、別々に兵舎を構えておったんですが。

この山部隊はね、私たちがよく行く壕掘りとか、土を、運搬だとか。あるいは松の木の皮をはいだりね、そういったところで親しいんですよ。仕事もよく分かる。ああ、この人たちはこんな仕事をしてると。壕掘りをしてると。

ところが、その球部隊というのは分からないんですね。何をしておったのか。すぐすぐ隣近所に住んでるんですが、分からない。

山部隊の人たちは、ものすごく親切でね。だいたい北海道や、東北の人が多かったんですが、かわいがってくれたんです。子どもをね。それから、うちに来て、よく「おばあちゃん、お芋ちょうだい」って言って、お芋をもらいに来たりしてたんですよ。

(続) (1) 山田国民学校

仲本先生

そうすると、そのヌンドウンチ（祝女殿中）のおばあちゃん、要するにおふくろの親、おふくろですね。要するに親ですが、その人は優しくて、この兵隊さんが来たら、もういろんなものあげておったよ。こういうにして、山部隊というのは、とっても子どももかわいがってくれた。

ところが球部隊はね、これはおかしいんですよ。子どもは脅かすしね、ちょっと悪いことすると、「この野郎」って言って追っかけたり、殴ったりするし。ええ。大変でした。

そしてね、芋はね、盗んでいくんですよ。台所から勝手に盗んでいくしね。山部隊の人は、「おばあちゃん、ちょうだい」と来るんだけど、ここの人は盗んでいく。

それから、あっちこっちのあぜ道にね、くそを垂れるんですよ。要するに、トイレ、の始末が悪いわけね。私たちはほら、ウマの草を刈りたりするときね、よくこのあぜ道を使うんです。そのあぜ道の、生えてくる短い草がね、ウマはよく食うんですよ。それで、そこで草を刈っておったら、よくそれに引っかけてね。うんちに引っかけて困ったりして、もう嫌だというような感じはしたんですが。

球部隊の人はそういったことでね、あんまり、村の人からよく言われてなかった。山部隊の人は、皆さん、よく言われておったんですがね。この違いは、いま何だったんだろうと考えたりするんですが。えー、まあ、こんなことがありました。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

4. 再び山田国民学校へ

(2) 朝倉さんとの出会い

仲本先生

山部隊ですけれども、ハトの専門の兵隊、要するに伝書バト。この伝書バトの小屋をつくって、そこの隣にちっさいテントを張って、一人だけ住んでるんですよ。食事は当然、本隊のところへ行ってやったりしていますが、普通は一人で住んでる。

私ハトが好きなものだから、いつもそこのハトの訓練をするのを、どういようにするんだろうというので、訓練を見ていました。そのうちに、その兵隊さんとお話をするようになって。

それからいろいろ話聞いてみたら、その兵隊さん、先生だったんだと。兵隊来る前に先生だったと。それから階級はね、私はよく分かるんですが上等兵でした。先生をするということでね、ああ先生、ということで、親しみをますます持つわけですね。

夜などね、そこのテントの中に泊まるんですよ。泊まって勉強教えてもらったりするんですね。というのは、この人一人ですから、本隊に比べると、わりとフリーなんですね。だから私は、そこに行って泊まって、勉強したりしてやっていました。

そして、その方もうちに呼んで、いろんな食事をあげたり、それから、ハトのね、餌がね、あるんですよ。豆腐豆とかね、それからトウモロコシとかあるんですが、その豆腐の豆は、ほら、豆腐できるじゃないですか。

そうすると、兵隊さんは自分でそうするわけにいかんから、うちのおばあちゃんとか持ってくるわけ。そこで豆腐をしてもらって、はいはい、どうぞと言って持っていくんですが、そんなことをしたり。あるいは、うちから肉類を持っていったりね。その兵隊さんとうまく付き合っていたんですね。

私の家からすると、ものすごく、いい先生ということかな。兵隊さんというよりは。朝倉さんといったんだがな。北海道の人で。この人がどうなったかどうかは知らないんだけど。結局、この人も、みんなと一緒に、部隊の移動と一緒に島尻に移動してしくわけです。

そして、これは後の話になりますが、戦争が激しくなって、もう終戦間際になったころですね。ハトがね、やっぱりその、たくさん飛んでくるんですよ。帰ってきたんでしょう。おそらく戦場からね、放されて。これを何とか捕りたいなって、あの兵隊さんのまねをするけど、私にはどうにも捕れなかったんですが、そんなことがあったりしましたね。

4. 再び山田国民学校へ

(3) 対馬丸が沈んだ噂

仲本先生

そして、そのころ那覇から、これは叔父に当たるんですが、いとこたちを連れて、その山田のヌンドウンチ（祝女殿内）に来たんですよ。

そしてその中でね、何か、船が沈んだよと。学童疎開の船が沈んだよといううわさが出てるんですよ。いまだと対馬丸というんですが、当時は私、対馬丸という名前も知りませんでした。学童疎開船が沈んだということで。

ところがね、この叔父さんのうち、このいとこのうちの兄さんがおりましたね、この人が対馬丸に乗ったんですよ。私も、この兄さんがいるから行く気にもなったんですが、でもあの、けんかしたために行かなかったんですけどもね。四つ年上の兄さんでしたけども、それに乗ったんで。

で、私が行かないということになったらね、うちの父はね、「ああ、まあ、やっぱり、危ないみたいだから、途中が危ないから、あんた行くな」といって、何回もその説得に行ったんですよ。行ったんですけど、この子は「いやいや、絶対に行く」と言ってる。

当時はもう、内地に行くということは大変なことですから。あこがれてね。それで対馬丸に乗っちゃったんですが、結局それで帰らぬ人になって、いまは小桜の塔というのがありますね。波之上の近くに。そこに眠っているんですが。

そのころね、浜辺を歩きますとね、オイルが浮いて。油が。そして、たくさんいろんなのが流れ着くんで、特に衣類が流れ着くんですね。その衣類はね、全部オイルがくっついて、べちょべちょにくっついて、もう使いものにならない。

ところがですね、いとこの人と一緒に、僕が浜辺を歩いておったら、マントがあるんですね。昔のほら、大学生あたりが羽織るようなマントがあるでしょう。三角形の。これがあったんですよ。

ところが、いっぱいオイルが付いている。何とかしようやということね、川に持って行って、うんとたたいたりなんかしてね、するんだが、なかなかやれないんで、何日かも何日もやって、やっとね、干したら羽織れるかな、ぐらいになったんで。

(続) (3) 対馬丸が沈んだ噂

仲本先生

このいとはね、何かね、やっぱり兄貴を思い出したんじゃないのかな。これを大事に持って行ったんですけども。まあ、私のうちから、要するにヌンドゥンチ（祝女殿内）に長いことおることはいけないので、金武かどっかに、中川かどっかに行っただと思います。

この対馬丸をね、調べてみますとね、結局、那覇の小学校、国民学校の生徒なんですね。那覇一帯のね。そして国頭とね、島尻はまた別の船だったらしい。その那覇の船が、その対馬丸だったらしいですね。そこに約800名ぐらい乗ったって。800名の学童が乗って、全体では1,500、1,600名乗ったみたいですが、800名の学童が乗って。

その中でね、生きたのが59名だそうです。生きた学童さんがね。その中に2人、僕の同級生がいるんです。高校時代の。女の子ですが。男の子は死んだんですが、女の子はやっぱり生きてるんですね。無理しないんですよ。泳げないから、いかだがあるといかだにつかまったりしてね。その女の子2人、生きておったんですが。

まあ、私も行かんでよかったなといって、胸をなで下ろしたんですが。しかし、うちの父は飛行場に勤めています。軍にいますから、結局沈んだいう、ということは、もうはっきり分かってるけども、まあ当時の秘密だったんでしょう。「うーん、分からない」とかね、「うん、そんなうわさもあるな」とか、それぐらいのことで、はっきりしたことは言わなかったですね。

4. 再び山田国民学校へ

(4) 昭和20年10月10日の空襲

仲本先生

それから、昭和20年の10月10日の空襲になります。それまではね、警戒警報とかありましたけれども、空襲というのはいないですよ。私たちの近辺ではね。要するに、沖縄本島にはなかったと思います。ないんだけど、この朝ね、弁当のおかずをつくっておったんです。弁当のおかずといってもね、油味噌。野菜がなんか入れて、油で味噌をいためてね。それをちょっと、サツマイモの隣にくっつけて、くびって行くんですよ、学校。サツマイモ、だいたい三つぐらいかな。三つぐらい、おかずになる、ちっちゃいの、木の葉っぱになんかに入れてね。こうして担いで、よく学校へ行っただんですが、それつくっておったんですよ。

そしたらね、上のほうでベーンと、その大きな音がして、たくさん飛行機らしいのがブルンと、何か急降下してるみたい。それで何だろうと出てみたらね、急降下していくんです。たくさん飛行機が。これが読谷飛行場に行くんですね。

それで、あら今日演習だというのでね、急いで屋根の上に駆け上がったんですよ。そして屋根の上から見ておりましたら、真っ黒い煙がボーンと出てきたんですよ。要するに、やっぱり、おかしいな、演習だのということだと思っておいたら、それがほんとに空襲だったんですね。

そのうちに兵隊さんが、「空襲だよ。隠れろ。避難しろ」と回って歩いたんです。それからびっくりして、避難壕に行ったんですが。ちょうどヌンドウンチ（祝女殿）の、後ろのほうに、避難壕を、ちょっとした穴を掘ってあったんですよ。そこにみんなで走って隠れたんですが。

そのころはですね、山田というところはほとんど攻撃されてないんです。仲泊と山田の間に、いま何とかいうホテルが建っていますね。リザンシーですか。そここのところにね、突堤を出して、栈橋にしてあったんですね。そこだけはちょっと攻撃されたんです。そこに船がおったんでしょう。そこだけが攻撃されて。

それから下がっていきますとね、私たちの山田の村から読谷に向かって、飛行機が下がって急降下していくんですが、ちょうど山田城址があるんですよ。山田城址の横のほうに穴が開いて、そこに遊軍の兵隊が機関銃を据えてる。機関銃を据えとって、ここを来るときに機関銃でバババツと撃ってるんですが、何回かそんなことはあったんですが、当たったかどうかは、われわれには分からないんですね。

(続) (4) 昭和20年10月10日の空

仲本先生

後でこの兵隊さん来ていたんですが、「いやあ、3機か4機落としたよ」って言ってましたが、これはほんとかどうか分からないんで。そんなに落としたかな、どうかなと思うんですけども。そんなことがありました。

それからですね、そのころから飛行機がよく来るんですよ。たぶん偵察だと思うんですが、B24というのがありますね。あるいはB29というのが、ずっと上空から、飛行群をしながら飛んでるんですね。これに大砲撃つとか何ということは、もうほとんどないんですね。もう空を自由に、飛んでるんです。

その中でね、このB24というやつ。この尾翼が2つ立ってる飛行機があるんですよ。わりと大きくて。これ、武装がひどいんですよ。後ろから撃てるし、下に撃てるし、上に撃てるしね、前からも撃てるしね。もうとにかく、すごい武装をした飛行機で。B20。その代わりね、あんなに大きいけどね、よく利くんです。これが。上がったりに下がったりがね。

ある日、その友達と山の中で、ここなんですけど、これと言うと、山田のヌンドゥンチがありますね。ヌンドゥンチ(祝女殿内)のうちは、こっちは道路になっておって、小さな道になっておって、馬車ぐらいが通る道ですよ。ここの山の上で、友達と草を刈りながら、遊んでおったら、そこはすぐ海ですね。海で、B24がね、ブーンとなってバリバリバリとやってる。上ったり下りたりしてるんですよ。急降下してね。

それで見たらね、船がいるんですよ。その船は、さっき言った、その棧橋から出たばかりで、どうしてそこにおったかという、防空壕はね、そのころからは今度は島尻にみんな持って行くんですよ。防空壕の、この梓木に使ったやつは。

最初そこで山田の山の中でつくったんですが、そのころからみんな取り払って、その梓木をですね、船に積んで島尻のほうに行くわけです。一晩中かかって、これをいっぱい積んだんです。船の中にね。青年団が集まって。その船だったんですよ。それをバリバリバリッとやってるんですわ。

そのころちょうど、戦闘機がね、ゼロ戦が2機、これがやっていると通ったんですね。「いやあ、しめた。これはやるぞ」と、こう言って、おったんですがね、ところがね、全然知らん顔。ペえっと通り過ぎた。それで結局、下のものは爆発して沈みましたけれども。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

(続) (4) 昭和 20 年 10 月 10 日の空

仲本先生

結局、非常に残念でね、それがね。何で2機もおってさ、はは、1機ぐらい落とせないの、ぐらいの。そして向かってもいかないわけでしょう。通り過ぎただけ。そんなことがあったりましてね。

ごめんなさい、話が前後になりますが、十・十空襲で、この辺に海が見えるんで、結局、那覇の中心街ですよ。いまのどの辺かな。若狭町か、その辺あたりじゃないのかな。こういったかたちになりましたね。十・十空襲で、もうほとんどなくなりました。焼けてるところです。

私の祖母はここに住んでおりましたんで、ここは幸いにして残ったんですよ。那覇市の外れですから。残ったんで、祖母はどうしたかという、仏壇をまとめて担いで、こんなに曲がってましたが、腰が。そして首里に、とぼとぼ、とぼとぼ登っていったんですね。

首里には、自分の長女がおったんですよ。で、その長女のうちに行って、そこでなん、何日かこう過ごして、やっぱり仏壇を担いでね、今度、山田まで来るわけです。歩いて。あれは何キロぐらいありますか。8里ぐらいあるはずですから、30キロぐらいか。

30キロか32キロぐらいの道をね、とぼとぼと、こんなに曲がったような人が、何にも持たない、仏壇だけ。はは、持ってきたんですよ。それで山田に、要するにヌンドンチ(祝女殿内)に合流したんですよ。戦争中はその仏壇はね、山の中に隠してあったんですよ。隠して戦後出してきた、この仏壇はいまも私たちの仏壇に飾られていますけども。

おばあちゃんのね、仏壇の思い出。祖先崇拝ですから沖縄は。祖先を思う心というのがね、いまごろ分かりますねと、いうことですね。それからですね、一応、その辺でお話終わるときましようかな。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

戦中・戦後の子どもの視点からのオーラルヒストリー 仲本實氏

(続) (4) 昭和 20 年 10 月 10 日の空

仲本先生

えっと、この話をちょっとしたいと思うんです。

十・十空襲の話したんですが、そこに、要するに私たちの家族が転がり込んでいくわけですね。ヌンドウンチに。そのヌンドウンチというのが、要するに母の実家になってましてね、その山田という村の中で、ノ口がおったところです。唯一、ノ口がおって、昔はそのノ口がね、何か政治的にも、いろんな司祭をするのに大事なところだったらしいんです。

そして、代々その女の子がノ口として、継ぐということであるんですが、うちの母のころからはそういったことがなくなって、ノ口そのものがそこにはいなくなっただけですね。

母のね、おばさんに当たる人。要するに、そこで生まれてるんですが、そのおばさんに当たる人がノ口として、どっかで、そのノ口の仕事をしておいたみたいですが、しかし、そんなのは、もうほとんどなくなってました。私が気がつくころは。

まあ、ヌンドウンチというところはそういうことで。だからうちも大きいしですね、それから財産もかなりあったんですね。それで私は、よく田んぼを耕したり、畑を耕したりしたんですが、下手くそでしょう。街から来るわけですから、とても下手くそでね。いつも人の、友達やいとこ兄のほうにお世話になったんですが、そんなとこでした。

そのヌンドウンチのあるところが、山田城址というのがあるんですよ。したがってそこはね、昔は城下町だったんですね。いま行ったら1軒もうちがないんですが、昔はそこは城下町で、ぼつりぼつり、私が覚えてる範囲でも、ヌンドウンチを中心に、その辺に5、6軒かな、7、8軒かありました。いまはもう全部道路のそばに移動して、そこに1軒もなくなってます。この写真がヌンドウンチのうちになりますね。

この写真の右横のほうに石垣が積まれてまして、前も当然石垣積まれてまして、でえんと大きなうちが建っておったんですが、その石垣の横のほう。

横のほうから馬車が1台通れるぐらいの道があって、そこに、要するに防空壕を掘ってあったんです。緊急の場合ですね。ずっと隠れるというわけじゃなくして、急に隠れなきゃならないときには、その防空壕に入ると。ちっちゃな防空壕でしたけども。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

5. 昭和 20 年地上戦始まる

(1) 敵機の飛来激しくなる

仲本先生

そんなことがあってですね、十・十空襲終わった後から、飛行機がちょこちょこ来たんですが。昭和 20 年になりますとね、まず正月の日に警戒警報鳴ったんですね。

警戒警報が鳴って、それからずっと警戒警報が何回か鳴ってですね。たしか私の記憶では 1 月 12 日、12 日ごろだったと思うんですが、グラマンが超低空で、私たちの村の上をびゅんと通り過ぎたんですが、何も攻撃なかったですね。

それと 1 月の 22 日にも同じようなことがあったんです。たくさんです、この飛行機は。どうしたのかなといって、私たちは聞いてないんですが。ところが、後での話はですね、那覇が空襲にまたあったらしいんですね。私は全然これ、知りませんでした。

そして、そのころはもう、兵隊はすべて山田の村から、島尻のほうに引っ越しております。

5. 昭和 20 年地上戦始まる

(2) 2月19日3人目の妹生まれる

仲本先生

そして、ある日、妹が生まれてるんですね。3人目の妹になるわけですが、その妹が2月の19日に生まれてるんですね。

そうするとヌンドウンチ（祝女殿内）はですね、11名の大家族になります。うちの家族とヌンドウンチ。ヌンドウンチの家族そのものは少ないんですよ。要するに、いとこの兄貴と、いとこの、妹。僕とおんなじ年になりますけれども、妹と、おばあちゃんと、3名暮らしたんですね。そうすると、そこにうちの家族が、大家族が入っていくんです。

そして、このヌンドウンチは、やっぱり広いもんですから、那覇から国頭に疎開したりするときに、よくそこ中継地になるわけですね。先ほどお話ししました僕のいところが、どっか行ったのは、要するに来たのは、そのヌンドウンチを中継にして、そこで2、3日泊まって、ほんとの避難をするところ、疎開をするところに行ったわけです。

6. 4月1日米軍上陸

(1) 父親が整備してくれた防空壕チビチリジャクの自然の洞窟

仲本先生

確かね、おとう、おやじが、戦争来るといのは分かっていますから、結局どうしたかという、家族のためには防空壕を整備しておかなきゃならないと。そこにね、チビチリジャクという名前、方言で言うんですが、チビチリジャクという名前がある、自然洞窟があったんです。

そうすると、そこをね、鍾乳洞とか、頭をけがしたりするのが垂れていますんで、それを割ったりして人が通れるように、あるいは、けがしないように。それから下に板を敷いたり、あるいは、わらを敷いたりして、人が泊まれるように。

で、かなり大きいんですね。わりと。何畳ぐらいありますか。20畳ぐらいあるでしょうか。それぐらいの入り口がありましたね。普通はそこで暮らすんですが、もっと怪しくなると、今度、一人が通れるぐらいの穴があって、奥のほうに入れるんですよ。

奥のほうに入りますと、またここに大きな穴があって、非常に怖くなるとそこに入るんですが、まあ普通は空襲という、入り口のほうに私たち隠れておったんですが。そんなことを整備していったんですね。

それから、やっぱり山のあちらこちらにね、穴を掘って、大きなかめを埋めて、その中に米をいっぱい詰めたんです。うちの父の仕事はそういったことをして、結局戦争に出掛けたんですけども、このときに蓄えた米がですね、ずっと後まで使われたんですね。

6. 4月1日米軍上陸

(2) 父との別れ

仲本先生

父は、たしか昭和の20日か、20年の3月の30日か31日だったと思いますが、ところが、これも定かではないんです。ただね、その父の部隊は、3月の27日に移動してます。首里のほうに移動してますから、3月27日には、みんな、その引っ越したという証言はあるんですけども。

ところが、うちの父は車持ってましたんで、トラックの運転手ですから、残務整理か何かで来ただろうと思うんです。30日か31日だと覚えてますが、そこに父が訪ねてきたんですね。そのチビチリジャクの、そのガマの中にいるころ、訪ねてきたんです。

で、父の教えたことがあります。「アメリカは女、子ども、年寄りには大事にする国だから、もし見つかって抵抗したり、逃げたりしてはいけないよ」と。「手を挙げて、壕からでな、出るように。その代わりに、逃げたら撃たれますよ」と。これを母にうんと言っていました、強く。

だから、来たら、結局捕虜にならんとか、当時の、死んでも絶対に捕虜にならんとかいうのがあるんですけども、父はですね、一番最後に来た日に、こういったことを言ってるんですね。絶対に逃げるなど。そして、手を挙げて出なさいということをやったんです。

まあ、私たちはそれをぼけっと聞いておったんですが、それが後で役に立つようになりますけれどもね。そして父は出ていったんですが、母は村外れまで送っていったんです。それで結局、父との一番最後の別れになるんですが。

そのころ、そして4月1日に米軍が上陸するんですよ。それがですね、4月1日か2日だったと思うんですが、私たちの隠れてる、この山のふもとなんですけれども、山の頂上にはですね、日本軍の電波探知機があったんですよ。日本軍の電波探知機があって、たまにアメリカのグルマンが、そこを機銃掃射で攻撃してるのを見たんですが。

4月1日か2日にですね、今度、そこから何か下りてきたんです。米軍が下りてきたんですよ。そうすると、当時の話はですね、アメリカさんはまず夜は歩けない、見えない。山は歩けない、それから夜は見えないということでしたから、誰もそっから来るとは思っていないんですね。

(続) (2) 父との別れ

仲本先生

山田の部落に来たのは、まずはその電波探知機を占領したんでしょう。そこからこう下りてきたんです。

そして、それがね、何名だったか知りませんが、とにかく、まあ、50、40、50名じゃなかったかと思います。そしてそれをね、ある年寄りが見たんですよ。そして隠れて見てるわけね。なぜなら、洋服が違ふと。

それから、ごじょごじょごじょごじょ話をしてるけど、言葉が違うみたいだと。これは敵だということで、隠れて見ておったが、間違いなく敵だということが分かって、いま分かったら、防空壕に飛び込んできたんですよ。

そして、「もう敵が来たよ」と言ったら、みんなわあっと、もう大変だと、もうびっくりしてね。もう言葉も出ないというような感じでしたよ。

そして、そのうちね、ぼつりぼつりと話が出まして「おい、この際だから、もうこっちから逃げよう」と言う人、それから「逃げたってしょうないじゃん、もうここまで来てるんだから。ここでもう自殺でもしよう」と。ということで、お話をしていました。

そのときに、うちの母は、非常に自信満々とっていました。うちのおやじがそういうことを言っておったと。

アメリカは、という国はね、女、子どもや年寄りをうんと大事にする国だから、殺したりしないよと。だから、手を上げて出なさいということを強く言われておるんで、母は皆さんにそういう話をしたんですね。それで、まあ、少し落ち着いたんです。

落ち着いて、その日はですね、結局、その防空壕が見つかることもなく。それと防空壕のちょっと、20、30メートル離れたところに避難小屋つくってですね、そこで、煮炊きをしておったんですね。そして、空襲がひどくなると防空壕に入る。それがひどくならないと、避難小屋へ行くという暮らしをしていたんですが。

その避難小屋の後ろのほうを、この米軍は通ったんですけれども、幸いにしてその日は、その避難小屋も、防空壕も見つからなかったんです。そして、みんなほっと安心したんですが。

6. 4月1日米軍上陸

(3) 神風特攻隊が来る

仲本先生

そのころからですね、特攻機が来るようになったんですね。私たちが山の上におりますと、特攻機がビューンと飛んでくるんですよ。そして、その代わりに、もう海は大変なんですね。このたくさんの船がもうジグザグに航行しながら、こう走って、ボンボン、ボンボン高射砲を撃ってるんですね。

撃ってるんですが、そのあいだを特攻機があるんですが、たまに2回ぐらいですか、見たんですが、まあぶつかったんでしょう、おそらく。しかし、ぶつかるそのものは見なかったんですが、要するに火の玉を上げてですね、真っ赤な火の玉を上げて、真っ黒くして、こう、逃げている軍艦は見たことはあるんです。

こんなことが2、3回あったんです。でもね、飛行機が来る数が少ないんですよ。われわれの考えているより。いつも2機か3機なんです。そんなことがですね、何回も何回かあったんですが。

そうすると、今度は夜になりますとね、日本の飛行機なんですね。ずっと上空を、おそらく偵察機か何かで、1機ぐらいで飛んでるんですよ。そうすると下から探照灯でね、何本もの探照灯で、照らしてるんですが、そうしますとね、全島から、船から、すべてから大砲が飛んでいくんです。その飛行機向けてね。

ところが、なかなかそこに行かないんですね。不思議なことに、この飛行機がありましたらね、飛行機よりずっと後ろに行ったり、前に行ったり、横に行ったりして、その距離がものすごく遠いんですよ。

飛行機との、弾の爆発するところが遠くて、あ、何だこれ、このアメリカさん、非常に下手くそだなと思ったんですよ。子どもながらにね。下手くそだなと思って、こう見ておったんですが。

その代わりにですね、そういったことがあると、今度危ないんですよ。ブルブル、ブルブルンといいながらね、その高射砲が、上のほうで破裂しますよね。その破片が落ちてくるんですよ。ブルブル、ブルブルと、こう変な音を立てましてね。

(続) (3) 神風特攻隊が来る

仲本先生

そうすると、もう急いで逃げないと、穴の中に入るか避難小屋の中に入るかしないと、それで、けがをしたり、あるいは殺されたりするんですね。だから、逃げるのに一生懸命なんですけれども。

私の友達が一人おったんですが、後で話ししとったんですが、こうしてブルブルッと来たんで、あれっといってぽっと前に寄ったらですね、後ろにプスッと刺さったという話をしていました。だから、そのぐらい、この破片というのも、やっぱり怖いもんでした。

6. 4月1日米軍上陸

(4) 最初の犠牲者

仲本先生

ちょっと話は前後しますけども、山田で一番最初に、撃たれて亡くなった人、空襲で亡くなった人がですね、兵隊さんなんですよ。兵隊さんとウマなんです。電波探知機はもう機能しなくなっていましたから。4月1日のころは、30日ごろからは機能しなくなって、もうそこは兵隊いなかったと思います。

そうするとそのね、電波探知機のほうから下のほうに、バリバリとこうグラマン機が、機銃掃射をしたんですよ。そうしたら、不思議にね、普通だと当たりそうもないんですが、これに兵隊がですね、兵隊とウマ1頭が当たったんですね。そして初めての山田の村での犠牲者が初めてなんです。この兵隊さんなんです。

ところがですね、4月1日、2日になると、もうそのアメリカさんは下りてきてますんで、この人を片付けてね、埋葬したりすることができないんです。そのままほったらかしてありました。

そうするとね、だんだんだんだん、日がたつにつれて、おなかが膨れてね、うじがわいて、パンクをしてね、やってるんですよ。で、ものすごく臭い。うちの隠れてる防空壕のほうからにも、うんとにおいが来よったんですね。

ところが、アメリカさんはそこをよく、その人の隠れていて、その場所なんです。一番こう、やぶがひどくてね、ジャングルみたいになっておって、そののそこを通るんですが、通るたびに撃っていくんですよ。この兵隊をね。死んだ兵隊を。腐っているんですが、兵隊を撃っていくんですね。

もうわれわれだと近づけないんですよ。臭くて。ところが、アメリカさんはもう、必ずそのそばを通って、撃ってから行くんですよ。帰りもまた撃ってから帰るんですね。まあ相当、その日本兵というのを憎んだのかなという、いまで考えるとそう思いますけれども。まあ、そんなことをしていましたが。

6. 4月1日米軍上陸

(5) 米軍との出会い

仲本先生

私たちはその避難小屋と防空壕の、行ったり来たりしながら暮らしていたんですが。上陸しても。ある日ですね、突然その米軍が来たんですね。4名。4名来たんです。そうすると、もう逃げる暇ないんですよ、みんな。それから、逃げるなど言ってるから。もう見つかってるわけですから、逃げないわけです。

そうしたら、そこの中へ入ってきましてね。そしてそれがね、ものすごく親切なんです。もう、にこにこ、にこにこして。そして、先ほどヌドゥンチのその妹さん、ちょっと髪が、ちょっと縮れておったんですね。おかつぱの髪が。

この子を見てね、自分のポケットから写真を取り出して、あ、これ、うちの子に似てると。というふうな感じのお話をするんですね。話は分からんけども動作で、そういうようなことで。

そしてかわいがって、お菓子なんかあげるんですが、誰も食べない。毒が入ってるだろうということですね。そして、自分でこう割ってね、食べてから「はい」と言いながら渡したんですが。それからは全部喜んで食べたんですが。

もうだんだん打ち解けてくるんですね。そして、うちのおふくろなどは、片言の英語で「チョコレートちょうだい」とかさ、そんなこと言って、チョコレートをもらって私たちにくれたりしていました。

とにかく和やかで親切だなと。最初、殺されると。鬼畜米兵ですからね、相手は。しかし、こんなに、もうみんな目を見張ったんですね。

そして、いろんなものをくれた。クラッカーをくれたり、缶詰めをくれたり、それから一番厄介だったのはチーズですね。あのころ、沖縄の人たちって、チーズ、われわれなんかチーズ見たこともないし、食べたこともない。

だから、においすると臭いんだよね。それで、これだけは誰も食べなかったんですが、残りはみんなおいしそうに食べていました。まあ、こんなことですね。

(続) (5) 米軍との出会い

仲本先生

それから2日目だったですかね。ニワトリをね、私たちは山の中に連れてきて、持ってきて、そこで放し飼いをしていたんですよ。そして、食料なくなったら、それをつぶして食べるというような感じでやってたんですが、その2回目に来たアメリカさんね、このニワトリが欲しいと言うんですね。

そしたら、このニワトリそのものがね、シャモですね。あの闘鶏用の。シャモをおやじが買ってきて、すごく高いシャモだったんですが、これを買ってきて、それと雌のニワトリとか、いろんなたくさんのニワトリおったんですが、そのアメリカ兵は、これが欲しいと言うわけ。そのしゃ、一番威張ってるシャモを。それで、これを売ってくれと言うんですよ。

そうするとね、これはたしかね、うちのおやじが買ったときに10円ぐらいでしたよ。もう、あのころの10円とは高いで、高いですからね。10円を買ってきたって言って、自慢して持っていたんですが。ところがアメリカさんはね、これに100円くれたんですよ。100円を買うと。それで喜んで、もう仕方、喜んででもないが、まあ仕方なく売ったんですね。

そうしたら首を捕まえて、もう一人、1羽を捕まえて、こうしてぐるぐるぐると回してこうしたらね、ぽんと切れて飛んでいくんですね。こんな殺し方もあるんだということだね、、珍しかったんですけども。そうして担いでいきよったんですが。

こんなことで、とにかくアメリカ兵というのはすごく親切だな。警戒心も緩んでって、もう壕の中に隠れないわけです。いつもその避難小屋にいたんです。

(続) (5) 米軍との出会い

仲本先生

ところがね、ある日聞いたら、その同じ、村の中で、あちこちの山に隠れてるわけですが、その中のどこかの団体が、1カ所だけ連れていかれたと。いなくなると。おそらく収容所かどっかに連れていかれたんだろうということになったんですね。それで、だんだん私たちが警戒するようになりました。

そして、ちょうど年ごろがいい年ごろですね。体は小さいし、年もとってないし、まあ一番いいくらいだろうということと、私といとこの兄。いとこの兄は、ほんとは僕より5歳年上なんですよ。

友達はみんな、防衛隊だとかね、護郷隊だとか、行ってるんですが、この人はあんまり小さいために行けなかったんです。それで僕と一緒に暮らしていたんです。僕たちと一緒に暮らしていたんですが。

その兄さんと2人、君たちは監視役だといって、選ばれたんですね。それで、それじゃあ行きましょうということで、私たちはよく、木の上に登って、その下からアメリカさんが来るのを見ておったんです。

ある日、また来たんです。やっぱり3名。3名来たら、おれおれ、するすると下りてですね、避難小屋に駆け込んで「いまアメリカ来たぞ」ということで知らせたんですよ。

そしたら、みんなばあっと散ったんですがね、ある年寄りが、おばあちゃんが、言った僕の手と、その兄貴の手をぐっとつかまえてですね。

あのころ、年寄りってあんな力あるんかなと思うぐらいの、その力を感じたんですが、ぐうっと握ってですね、「君たちは子どもだから殺さない。だから、あの火見ておきなさい」。ちょうどお昼を炊いておった。「あの火を見ておきなさい」と。と言って逃げていったんですよ。

ところが、考えてみるとですね、このおばあちゃん、普通は何て言っておったかという、「私たちはもう年寄りだから、いつ死んでもいいだろう。でもね、一番大事なのは子どもだから、子どもから先に逃がすんだよ」といって、口癖のように言っていたおばあちゃん。

この人が、われわれ二人をつかまえてね、君たちは残っておきなさいと、自分は逃げちゃった。こんな話がありましたけどもね。おかしい話が。

7. 家族は難民収容所へ

(1) いとことわたしが捕まる

仲本先生

まあ、みんな逃げたもんだから、やっぱり、われわれ火見ていたら、アメリカさん入ってきたの。入ってきて、それでわれわれ2人いるのを見て、どっかに連れていこうということですよ。

それで、初めのうちは、洋服も何も持たんで、ただついていったんです。ただついていった。しばらく行くとですね、米軍がですね、そこらの6名か7名か、7、8名ぐらい、たむろしておったんですね。無線機を囲んで。そこに連れていかれた。

そうしたら、その兄貴は気がついたんです。ひょっとしたら、われわれを収容所に連れていくつもりだよと。ていうことになって、うそをついてるんですね。ジェスチャーで、ご飯取ってくる。壕行って、ご飯と着替え取ってくるというふうなことを言って、逃げようと言うわけさ。それで、君も行こうということで、僕にも言っていますが。

ところがアメリカさんはね、やっぱり人質取らないといかんから、僕を「君は残とけ」というような感じで。ですから、もう兄貴は仕方がないから、さっきの避難小屋へ行って、ご飯と、それからちょっとした着替えを持ってきておりましたけども。

まあ、こんなことで、帰ってきてからの話なんですけど、この兄貴がですね、アメリカの本を何か見ておって、大きな字でABCを書いてあった。

それを見てね、「ABC」と読んだんですよ。そしたら、これからアメリカさんが一変するんですよ。これまでね、何となく、やっぱり捕虜を捕まえてるわけですから、そんなに、にこにこしてるわけでもないけども、でもね、一変して、もうにこにこしてるんですよ。

表情がまったく違ったんですね。そして、ありゃ、これは英語知ってるというわけ。「ABC」。ところが兄貴は、そのABCの次は分からんわけですよ。次はDだよと言ったら、それも知らない。はは。もうABCばかり繰り返していた。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

(続) (1) いとことわたしが捕まる

仲本先生

それでそのうちに、ほかの部隊から無線がかかってきて、わんわんわんと、しゃべってるわけですね。そしたら、無線機を取って、話をしてるんですが、しまいには、われわれ二人の話になっただけで。

「トージョーイッサー、トージョーイッサー」と言うと、こうして僕らの顔にマイク近々、あ、これは何か言ってるな、言えということだなと僕は、そのとおりに「トージョーイッサー」といって大きな声で言ったら、わっはっはして喜んでるんですよ。

それで、あ、これ面白いなと思ったから、また近づいて言ったら、また「トージョーイッサー」って何回も言わされたんですが。まあ、そんなことで。

それで次はですね、「ヒロヒトデンプー」。「ヒロヒトデンプー」と言いなさいと言うから、僕はまた一人、「ヒロヒトデンプー」と言う。兄貴はそれ、言わなかったんですがね、私は何回も言ったんですよ。もう喜んで。結局、すごく打ち解けたようだったんですが、ところがね、やっぱり連れていかれたんですよ。

そして、村の中でね、焼け残ったところありましたから、そこに連れていかれましたらね、あちこちから集められた、避難民がたくさんおりました。ああ、われわれはやっぱり連れていく、行かれるぞと、思ってるわけですね。

そしたら、そこで兄はどうしたかということ、やっぱりあちこちに見回したらね、天井の隅っこのほうに、その穴が空いてるんです。四角のね、穴が空いてる。そしたら、そこに上がろうと言うわけですよ。

僕の胸のところでこうしてね、目で合図をして、こうやってるんです。ああ、ああ、入ろうということだな、上がろうということだなということ。

そして、その辺にあった、あれを床下に、吠（かます）の中に着替えとか入れてましたんで、足で入れて、ぱっと人の見てないときに、ぱっと二人上ったんですよ。

(続) (1) いとことわたしが捕まる

仲本先生

それからが大変でした、ほんとに。何時間もたつとね、しばらくしたら、この下の人たち、やっぱりみんな連れていかれました。いかれたんですが、われわれは上でやってる。ところが、下はゴトゴト、ゴトゴトしてるんですよ。床の上をね、何か歩くような音なんですよ。下りられない。

そのうちにしっこをしたくなる。もう大変なことですよ。仕方がないから、あっちにちよろん、こっちにちよろんって、その天井の上をはいずり回ってるわけですよ。あれはもう、1回出すと大変ですね。はは。もう止まらない、え、止まりにくいんで、もうあちこちはいずり回って、やっと済ましたんですが。

それから何時間かたって、夜の9時ごろだったんですが、物音がしなくなったんで下りたんですよ。下りたらですね、避難小屋のほうに行ったら、その避難小屋は、ほんとに火を炊いて、もう夕げ時なんですね。夕食を食べてるんです。笑いながらね。ほんとに幸せそうに見えました。

それを見て、2人はやっと逃げてきたのに、それを見て、うんと怒ったんです。特に、僕よりは兄貴のほうが、怒ったんですね。5歳も年上だから、相当の精神的に発達してますよね。うんと怒ったんですよ。あんた方は、われわれがこう、捕まってね、殺されるかもしれないのに、こんなことしてるといって、ことでね、怒ったんです。

岐阜女子大学「沖繩おうらい」

7. 家族は難民収容所へ

(2) 家族との別れ

仲本先生

それで、結局、もうわれわれ監視に行かない、ということになって、それから行きませんでした。また、別のところ行って、家族とは別に逃げてました。昼は、山の中に。

そうしたら、監視をする人はいないわけですから、結局、その2、3日後に、4、5日だったんですかな、来て、アメリカさんに捕まっちゃった。そのときには間違いなく、こう避難民を集めてるんですね。そのアメリカさんたちは。そして結局、家族全部集めて、全部連れて行って、村の中に下りていくわけです。

下りていくわけですがけれども、その途中でですね、又ドゥンチ（祝女殿内）のおばあちゃん。このおばあちゃんはね、孫2人置いてるわけでしょう。山の中に。僕と、要するにその兄貴とね。

そうすると、この二人を置いていくのは忍びないから、途中、蛸壺かどっかにぽんと飛んでですね、やり過ごして、そして山の中に来てるんですよ。そこで大きな声でね、私たちを呼んでるんです。

何て呼んだかといったら、「マチュー」って感じでね。方言名がね、沖縄ではね、昔はよく本当の名前と、方言の名前、要するにあったんですよ。すると、この兄貴はマチューといったんです。

本当はそうじゃないんですけれども。それと私は、この人たち、あちこちからいつも出歩いてるから、別のところで生活してるから、僕の沖縄の名前分らないわけです。だから、ミノルと言っているわけですね、そのまま。

そうすると、ところがおばあちゃんだから、ミノルと言えない。ミルルと言うんですよ。だから、「マチューヨー、ミルルーヨー」といって、山の中で大きな声で言ったんですよ。

(続) (2) 家族との別れ

仲本先生

そしたら、山の中で、あれ、おばあちゃん、何か言ってるぞということですね、われわれ2人出ていったんです。出ていったら、「あんた方の家族ね、おふくろも全部、そこにおった人たち全部連れていかれるが、どうする、君たち」と言ったら、私たちはもう、どっちかということね、意地になってるでしょう。

あの、もう監視もしないといって、この山の中へ来てるわけですから、意地になってるから、行かないと。行かないということですね、聞かないんですね。

そうすると、おばあちゃんも、もう仕方ないから、孫たち残して、その自分も出ていくわけにいかんから、じゃあ私も残るということで残った。

ところがね、やっぱり心配ではあるんですよ。村の中に下りて行ってね、おふくろたちが行ったであろうところを、わあっと追っかけていったんですよ。追っかけていっても、でも会えなかったですね。

ところが、ちょうどそのときに空のほうでね、あの、1機のゼロ戦をね、4機のグラマンがこう、追っかけて、要するにそこで空中戦をしてるんですね。これは、しばらくしたらね、機関砲からバリバリと、こうやっておったんですが、しばらくしたら当たったんですね。

それがね、もう真っ黒い煙と火に包まれて、真っ赤な火に包まれて、だけど、ビューンと落ちるかと思ったら、こんなして落ちていくんですよ。ひらり、ひらりと。木の葉が落ちるようにね、落ちて、あれ、飛行機っていったら、そんなに落ちるのといって、不思議がったことはありますけれども。

まあ、初めてそんな空中戦を見たんですね。でも、すごく残念でした。日本の飛行機が落とされるわけですから、すごく残念だったですね。

8. 山中での暮らし

(1) 山に残った人々

仲本先生

それから、山の中でどれくらい暮らしたかといいますとね、要するに、ヌンドウンチ（祝女殿内）の家のおばあちゃん、そして、そのいとこの兄貴、そして僕。それからね、ごく近い親せきのおじいちゃん。4名残ったんですね。

そしてから、あと一つの家族。その夫婦ですけれども、Kおじさん、Kおばさんが一緒になって、結局残ったんですね。6名ですか。

6名残って、結局、昼は山奥に逃げるんですね。夜は帰ってきて避難小屋で暮らしてる。そういう暮らしになったんですが。

8. 山中での暮らし

(2) 兵隊や防衛隊から帰って来た若者たち

仲本先生

そこに防衛隊とか兵隊からはぐれた連中が、自分の村に帰るためにそこに来るんですね。来るけれども、もう村はいけないから、自分のうちはいけないから、結局、われわれがそこに住んでるところと一緒に住んだんです。住み着いたんですね。

で、私は、まあ私からすれば兄さんたちですね。その人たちから戦争の話を聞いたり、いろいろやったんですが、すごくたくましいなど。それから、仕事もですね、やっぱり軍隊ですかね。7、8名ぐらいおったかな。5、6名かな。

はい、あなたは何当番、あなたは何当番って、当番も決めておって、暮らしてるんですね。ああ、すごくすごいな、たくましいなと思ってました。

そして、こんなして暮らして、この人たちも結局逃げるわけですよ、昼は。私たちよりももっと安全な、と思われるところに逃げるんです。捕まったら間違いなく殺されますんで。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

8. 山中での暮らし

(3) 吸殻探し

仲本先生

ところがその日、うちの兄貴、要するにいとこ兄貴はね、たばこ吸ってたの。

そのたばこを吸いたいが、普通はね、松の葉っぱを巻いてね、それでたばこにしたりしてたんですが、面白くないから、アメリカさんが通った、よく村の中を歩いてね、吸殻捨ててあるの。

あるいは弁当の食べ殻を捨ててある。そういったのを捨ててあるんで、それを探しに行くわけですよ。そうしたら、ちょうど角でぶつかってね。ぶつかったら、ぱあっと手を上げて。

だから、アメリカさんはこう銃を構えるけれども、子どもだから撃つことはないの。そしてしばらく、おい、来い来いと言って、結局自分たちの、持ってる缶詰くれたり、クラッカーをくれたりするんですね。

で、私が一番欲しいのはね、マッチなんです。山でマッチがない。火を付けるのに、一番は困るのがマッチなんです。もう、これは見て知ってましたんで。

これらがね、たばこ吸って、あの紙のマッチがありますよ。よくバーか何かでよく使ってる、折り曲げた。あれをたばこを吸っておったんで、「このマッチくれよ」と言うと、こう言ったら「うん」と言って、こう僕にあげたんですよ。「もっとくれよ」と言うと、ポケットから全部探して、こうして探してね、僕にあげたんです。

こんなことして、私たちは、自分の避難小屋に帰るわけですね。避難小屋に帰ったら、そのおばあちゃんにこれを渡すわけですよ。渡すんですが、もうこれが一番大事なもんですよ。

火を使う場合にね。いちいちこう擦って、昔みたいに火をおこすわけにはいきませんのでね。それで、要するに、火を付けるには不自由しなかったんです。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

(続) (3) 吸殻探し

仲本先生

ところがですね、隣といってもほしい、そうですね、100メートルか、200、300メートルぐらい離れておるところに、いくつかあったんです。隠れてるグループがあって、そこはね、マッチがないんですよ。

夜になるとね、5年生。僕はもう6年生になってるんですが、その僕より一つ年の、5年生を先頭にして、男の子を。お婆さんたちが、そろそろそろそろついてくる。山から。うちに火をもらいに、火種をもらいに来るんですよ。

9. 米兵の態度がだんだん陰悪になる

(1) 二人の日本兵殺される

仲本先生

ある日ね、例のとおり、やっておりましたらね、この男の子がね、ぶやんとしたのをね、踏んづけたんですよ。真っ暗ですから何も見えない。

それで飛び越して見たら、人が死んでる。ということで、「あら、人死んでるぞ」と言ったら、このおばさんたちはもう、「ええっ」と言って見て、驚いて、後ろ向いて自分のところに、みんな逃げて帰ってしまった。

男の子は今度、越えてこちらに、あれらと一緒に行かないで、われわれのところに逃げてきたんですね。そして、こうだったということ、話をしたんです。

そしたら、結局あの若い人たち、兵隊から来た人たち、防衛隊から来た人たちが、ああ、そうかということで、じゃあどこだったということで見に行ったら、ここだったんです。

要するに、この写真にある、ますね。これがね、写真の上のほうで、こう曲がってるんですよ、道が。道路が曲がって、そして下から来るアメリカ兵と、上から来る日本兵が、ここでたぶんぶつかったんですね。

そして、そこで日本兵が撃たれたんです。で、片付けに行ったらですね、一人じゃなくして二人だったという話をしました。結局、しかし、日本兵は武器も何も持ってなかった。

結局、そこでぶつかって殺されたんだらうということで、お話をしていました。

9. 米兵の態度がだんだん険悪になる

(2) 母との再会

仲本先生

ある日、母が訪ねてきたんですよ。同じ防空壕に隠れておった人たちの代表を連れて、母が訪ねてきたんです。山の中に。

これを私はどうして知ったのか分かりませんが、知ったんですね。そして母は、ちっちゃな生まれた子どもを抱えて、おんぶをしているんですが、山から、山の防空壕や避難小屋から、荷物をトラックに運ぶんですよ。

トラックに運ぶあいだ、その往復をしてるあいだ、僕が妹をおぶっておったんですね。たぶん2、3カ月ぐらいだったと思うんですが、先ほどの2月19日ですから、5月で、まあ2、3カ月ですね。

そうすると、ちょうど笑うところで。よく昔の人たちはね、子どもをあやすときに「ンクー、ンクー」と言ったんですよ。「ンクー、ンクー」と言ったら、この子はね「ングー、ングー」と言って答えておったの。笑って。

これ見たらもう、悲しくなっちゃったね。もう、おふくろについていきたくなくなったんですよ。そしたら、もう行きたいと思っておったんですが、しかし何も言わなかった。口から出すことはなかったんですが、しかし、おふくろは、ほかの人たちと一緒に、そのトラックと、その避難小屋を往復して荷物を運んでいって。

一番最後になったら、妹を連れて帰ろうとしたんですよ。ところが私も帰りたい。そのときは。帰りたいけど、もう言えない。ところが、おふくろ言ったんですよ。

「この世の中、どっちが助かるか分からんから、あんたはそこにおっときなさい」と。5月の中ごろですよ。そう言っていたんです。だから、これ、いまから考えても、すごく強いおふくろだったなと、いま思うんですけども。

それからは、いつもやっぱね、残ったことを後悔しましたね。恩納岳ってあるんですが、恩納岳のあっち側、ふもとのほう側に、金武という部落があるんですね。その金武のところにいるとって話してましたから、ああ、あっちが、あの辺にうちの家族はいるんだなとって、いつもそこを眺めていました。

昼になるとね、山の上でそこを眺めたりね、夜になると、泣いたりしてました。ただ、恥ずかしいから、見られるような泣き方はしないんですが、隠れて泣いてました。まあ、そんなことがあったりしましたね。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

9. 米兵の態度がだんだん険悪になる

(3) 父親を殺された一家

仲本先生

そのころからですね、アメリカさんの態度がね、だんだん険悪になっていくんですよ。険悪になってきてですね。ある日、やっぱり僕たちはいつも、高いほうにいますよ。

低いほうにいと情勢が分からないんで、高いほうにおいて、高いほうから、こう見てるんですね。見ておったら、下のほうで、ずっと下のほうで、バシン、バシンって、何か人間でもたたくような、木の葉でたたくような音がするの。

あれとって見たら、アメリカ人らしい人が、沖縄の人らしい人が、そこにいるんで。そして何か大きな声で、英語みたいな、しゃべってるみたい。

それから、何か人の、沖縄の人たちの声も何か聞こえるみたいで、それを見ておったんですが、はっきり分からないんです。そのうちに、バンバンバンとやったんですね。それからしばらくしたら、そこから3名上がってきたんです。

女の子2人とおじいちゃんと。女の子の上のほうが、ちょうど僕とおんなじ年でした。聞いてみたら。おんなじ年で、女の子、ちっちゃい女の子はね、8つとか言ってました。8歳とか言ってましたから。

そのおじいちゃんと3名、上がってきたんです。そして、どうしたんだと聞いたら、国頭のほうから読谷を目指して、お父さんと4名で来たと。

そして、そこで昼になったんで、そこの一番深いところ、見えにくいところに隠れていた。隠れておったらアメリカに見つかってね、そしてお父さんが殺されたんだが。

お父さんを殺すときに、このおじいちゃんとお姉さんは後ろ向かって、一番末っ子の、この女の子はお父さんを見せとって殺したというんですね。

これは大変だなという、私は思いましたけれども。あの小さいころでもね、何で必ずね、一番ちっちゃい子を見せとっておやじを殺すんだらうと、思ったんですが。まあ、そんなことがありました。

その人たちは、2、3日したらどこかに出ていったんですが、まあ、どこへ行ったか、私は分からないんですがね。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

9. 米兵の態度がだんだん険悪になる

(4) 恐ろしい目に遭う

仲本先生

夕方になりますとね、山の上の電波探知機あったところに、すでにもう、米軍が電波探知機つくったんですね。そこから下のほうに向かってね、もうほんとにバリバリバリと、一斉射撃をするんですね。

それを合図にして、この辺で山狩りをしておった2、3名です。だいたい3名か4名なんですが、その山狩りをしておった連中がね、今度は暗がりとか、そういったやぶに、バンバンバンバン撃って、それから引き上げていくんです。

そうすると私たちはですね、これで安心するわけだ。ウワイディッパー。方言でウワイディッパー、終わりの鉄砲ということだね、これが鳴ったら彼らはもう帰るよということなんですよ。ウワイディッパーということで帰るんですよ。

これが鳴ると、しばらく様子を見て、さっとまた避難小屋に下りてくるんですが。その日ですね、その避難小屋に歩いてる、先頭はそのおばあちゃん。それからおじいちゃんがおって、それからお兄さんがおって、僕がおって、4名こう下りていったんで、一番後ろの僕のほうがですね、アメリカさん見つけたんですよ。兵隊を。

「やあ、アメリカードー」と。とって、こう言ったら、そのおばあちゃんは後ろを振り返って僕を見て、「シカーグーヤ（臆病者）」と。臆病だと言うわけですよ。怒られたんで、もう仕方なく、そのまま入っていったんです。

入っていったら、3名おりまして、三方を囲んでいるんですね。われわれ、その真ん中へ入っていったわけです。その真ん中にね。もう逃げるわけにいかないですね。

そしてね、ところが、ここのほうに女性がいますよ。日本の女性が。ひと言もしゃべらなかつたんですが、おそらくどっかで拉致されてきた人ですね。非常に、服装も乱れておりまして、顔も非常に悲しい顔をしていました。

で、そこに入ってきたんで、われわれはもう仕方ないから、そこへ4名座ったんですよ。どうも大変だ。ところがね、どっちかということ、ある程度、われわれ助かるんじゃないかなという気はするんですよ。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

(続) (4) 恐ろしい目に遭う

仲本先生

なぜかという、そこに日本の女性がいるわけですから。心配するのはね、あの若い連中。若い人たち。この人たちが帰ってこないかなというのが心配なんですね。ところがね、やっぱり当番は早いんですよ。

炊事当番である人がね、お兄さんが、こっちから、着物を着けていますから、こっちからタオルを出しながら、「ンメーサイ、ンメーサイ」と。何か遠くのあの辺にね、われわれが座ってたの見たんでしょ。

「ンメーサイ、ンメーサイ」と言いながら。ンメーサイというのは、おばあちゃん、おばあちゃんということだよ。そう言いながら。そして、自分もこの避難小屋に入って、そこに針金掛けてありましたんで、それにタオルを掛けようとしたの。そのときにね、自動小銃をここにくっつけられた。おなかにね、自動小銃くっつけられた。

そして、後での話ですが、「ダメレ、ダメレ」と言ったらしい。手を離して、こうしてるのを「ダメレ、ダメレ」と言ったらしいんですが、そのときにぱっと逃げたんですよ。

そうすると、ちょうど避難小屋がこうありますと、これから土手になってるのを、この人はぷうっと、こう逃げたんですよ。これからいくら撃っても当たらない。すると、われわれはこの辺におって、ああ大丈夫、逃げたと、行くのを見ておったんですよ。で、ああ、大丈夫だったよと。

それと、もう一つ安心したのはね、鉄砲の音が聞こえたから、もうほかの連中は帰って、もう来ないだろうという安心したんですが。ところがね、そのときになって、私と一緒に座っておった、そのおじいちゃん。このおじいちゃんがね、あの、びっくりしてるんですよ。

鉄砲を撃たれたんでね。もう、音を聞いたんでびっくりしてからに、アメリカさんにこんなして言ったんですよ。「なあ、もう、私はもう年も60近くなっています。どうか命だけは助けてください」と、にじり寄っていったわけよ。そうしたらアメリカさんはね、「何」というような感じで、自動小銃をぽっと向けたんですよ、こうして。

そうしたら、おじいちゃん、ますますびっくりして、「ああ、ワッターヤ、ヒンギーンドー」と。僕は逃げるということよ。誰かが「おじい、逃げるな」と言ったんですが、ぶんぶんぶんぶんと。

(続) (4) 恐ろしい目に遭う

仲本先生

そのころは着物ですから、わら帯をしています。それが外れてね、ははは、着物をひらひらさせながら、ふんどし1本でばあつと逃げていったんですが。「オジー、ヒンギランケー」といって言ってるんですがね、ああ、もう変な声出して、鳴き声出して、ばあつて逃げていったんですが、幸いに、やっぱり年寄りだから撃たなかったんだ。それでひと安心ですよ。

それから、かなり安心してましたね。まず、鉄砲が鳴ったから若いもんが来ない。それから、おじいさんが逃げても撃たないということですから、安心していたんですが。

ところがね、また来たんですよ、2人。まきを担いで、まき当番。この人ね、一番前になっておったおじさんはね、すぐ見つけたわけですよ。もう仕方ないから、まき下ろして帰ってきた。後ろの人も見たんですよ。

見たらね、彼は逃げられると思ったのか、これ静かに下ろしてね、おしっこするみたいに、ま後ろを向いて、要するに来た方向に向いてるんですよ。それを、こっち側に座ったアメリカさんがバンバンと撃ったんです。

そしたらね、何か変な声を出してね、溝になってましたから、そこに倒れたと思ったんですよ。倒れたと思って。「あいや、撃たれた」といってやったんですが、アメリカさんもすぐ、そのころから電灯をつけて、そこを探したんだがない。ところが、血の跡がある。

血痕を探していったんですが、もう夜ですから、アメリカさんだって怖いんです。遠くまでは追っかけていかない。しばらくしたら引き返してきたの。引き返してきて、われわれに銃を向けたんですよ。自動小銃と。

そして、この女性を後ろにして、そして僕らに向かって、こうして後ずさりしながら帰っていったんですよ。

こうしたんでね、私たちはもう、もう、今度殺されると思って、そこへ4名座っておったんですが、その後から入ってきたおじさんと5名になっていますよね。そして、ばあつと逃げたんです。彼らはこうして行ったんですね。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

(続) (4) 恐ろしい目に遭う

仲本先生

それで山の中に逃げて、茂みに隠れておったんですが、このときの恐ろしさっていうのは、もう大変なもんですね。人間というのは、あんまりびっくりするとね、胃が鳴くんですよ。ぐうっ、ぐうっといって。

茂みに隠れておっても、これがうんと大きな音で、くう、くうと鳴くもんですから、もうおなかを押さえて押さえて、こうやってるんですが直らない。そのうちに、ばさっ、ばさっとな人が来ると、あいや、もうこれ、もうってやっておったら、ばさばさっとな来た人が、そのお兄さんだったんです。

お兄さんもね、みんな散ったは散ったんだけど、僕がいないもんだから。私も、一番びっくりしてますから、出ていかないの。びっくりしてるもんだから、探しに来ておったんです。まあ、それでね、ものすごく、もうほんとに怖い思いをしましたね。もうこんな思いは二度と、もうやらんと言ったんです。

そしたら、この撃たれたおじさんは、結局ひっくり返ったと思うんですが、アメリカさん、電灯つけても見えなかったから逃げたんでしょ。と思ったら、結局ね、やっぱり撃たれとって、逃げて行って、別の山の上、頂上のうち行って、そこで倒れておった。

そこを若い人たちが帰ってくる时候に見つけて、担いできてあったんですが、ちょうど肩を撃たれていましてね。まあ、そんなことがあったし、恐ろしい目に遭いました。

10. 石川難民收容所へ

仲本先生

後からね、若い連中がぞろぞろ出てきたときに、このアメリカさんたちは、もう興奮して、ほんと銃をこう向けたらしいんです。幸いね、MPがおるから、何でもなかったんですけど。もうほんとに構え直して。

そして、これをぞろぞろ行って、トラックに乗せられて、石川に連れられて行くわけです。そのときにトラックの上でね、読谷飛行場の辺りからね、大きな、もくもくと真っ黒い雲、煙が上がってるんですよ。

へえ、何だろうと言ったら、また特攻隊がやったんじゃないと言う人もおったんですが、石川着いてみたらね、やっぱり特攻隊がやったという話なんですね。特攻隊が、そのゆうべ来てね、やったと。

その写真は後で見たんですよ、私。見たが、日にちも何も分かんなかったんですが、後でね、インターネットから調べてみたら「沖縄戦場」というホームページがあって、水ノ江という人が、秋田の人ですけれども、彼がね、それを載ってるんですよ。これがそうなんですけれども。

結局、義烈空挺隊というのを組織して、読谷飛行場に胴体着陸してるんですね。ほんとは向こうを出るときは10機だったらしいんですが、とにかく読谷飛行場に突っ込んだのは1機なんですね。突っ込んで。

そっから全部散って出て、その辺にあるアメリカの飛行機に火を付けたり、爆弾を投げたりしてやって。それからガソリントankに火を付けて、この人の話だと、600万ガロンといいますから、相当のガソリンが燃えたんですね。

その燃えたのが、われわれが、收容所に行くときの、あれだったんだろうと、思ったんですが、これは後の話なんですね。

仲本先生

そして水ノ江さんは、秋田県でね、警察官で、ヘリの救助隊の副隊長さんで。後で、私会いましたけれども。わざわざ毎年、沖縄に来て、30年になると。30年の間にずっと調べて回って、こういうふうなことをやってるんですね。こんな人もいますですね。

沖縄に何月何日から行きますという、メールが来たんで、ああ、そんならぜひ会いたいですということでね、お願いしますということで、会っていただいたんです。

それが、収容所に行くときの、あの煙だった。読谷飛行場のね。この人の調査からすると、かなりの被害を受けていますね。アメリカの飛行機から、ガソリンタンクからね。

少し後戻りしましてね、その山の中での食料事情について、もう少し詳しく話しましょうかな。

山の中には、うちの父などが、米などは備蓄するように、穴を掘って山の中に、隠してあったんで、そういったもので間に合ったんですが。ところが、肉類とかですね、こういったのはどうしたかという、当時ね、ブタとかヤギとかウシ、ウマ、たくさん、逃げて歩いとったんですね。

そうすると、若い人たちがそれを捕まえてきて、つぶしてやっただんですが、ブタとかニワトリとか、そういったものまでは、われわれでもできたんですが、やっぱりね、ウシとかウマとかいうことになるとね、若い人たちが連れてきて、やっぱり殺していました。それをね、塩漬けにして、また蓄えると。そういうふうな状態でしたね。

ですから、やはり山の中でも、要するに、私たちの村の人たち、地域の人たちは、そんなに食料には困らなかったんじゃないかと。ただね、疎開で南部あたり、島尻あたりから来た人たちがいましたので、こんな人たちは非常に困ったかもしれません。

特に、自分の配置されたうちから離れた人がいます。この人たちはね、非常に困っただろうと。食料関係では。うちに配置をされて、そのうちの人と一緒に逃げてる人は、おお、やっぱり食料事情はよかったんじゃないかなと思います。それと、日本軍の食料なんですけど、これはもう大変でした。われわれ子どもから見ても大変だと思いました。

仲本先生

例えばですね、防空壕を掘ってるんですが、防空壕は1カ所から掘るんじゃなくして、両方から掘っていくわけですね。そうすると、真ん中でつなぐわけです。そのつないだときに、やっぱりあの、お祝いみたいなことをするんですよ。兵隊さんね。

そうするとね、われわれ子どもにもね、「おい、今日、天ぷらがあるぞ」とかね、あるいは「今日はごちそうが出るぞ」と言っただけで、「来いよ、遊びに来いよ」といって誘う兵隊さんがおったんですよ。

行ってみましたらね、兵隊さんがおいしそうに食べてる、その天ぷらがね、ほとんど天ぷらじゃなくして、何かな、かずら、葉っぱ。これを油に乗つけたようなもので、ほんとに天ぷららしくないもの。ええ。ほとんど、かずらでしたね。かずらの葉っぱ。イモの葉っぱですね。それでした。私たちが食べてもおいしくない。子どもが食べてもね、おいしくない。

それから、地元の人ですから、私たち、うち帰ると、わりとおいしいもの食べてるわけですよ。それで、兵隊さんは、こら大変だなと思いました。

それで、うちのおばあちゃんなんかも兵隊さん見ると、どうぞどうぞといって、よくうちの中に上げて、兵隊さんに食事してもらってました。兵隊さんも、「おばあちゃん、おばあちゃん」といってね、非常になつておったようです。

まあ、そんなことで、日本の兵隊のこの食事というのも、大変だったと思うね。それからですね、ご飯。要するに、米だけじゃないんですよ。米にサツマイモが入るんですね。

それはそれとしていいんですけども、たくさん入るんですよ、もう。米よりも多く、サツマイモのほうが多いんですね。

それならまだ許せるんですよ。ところが、サツマイモには、虫の食ったのがあるんですね。その虫の食ったのは、これ1本入れると、この鍋全体がにおいするんですよ。ええ。くさいの。これをね、兵隊さんたちはもうほんとに、はは、一生懸命食べてました。

これ見てね、私たちは、ああ、兵隊さんって大変だなという思いをしたことがあります。それでまあ、うちのおばあちゃんなんかも、このヌンドンチ（祝女殿内）のおばあちゃんですよ。兵隊さんが来ると、いろいろ食事を出してあげてました。

(続) 10. 石川難民収容所へ

仲本先生

これは後の話になるんですが、米軍と比べると、もう大変な違いですよ。後で出てきますけれども、アメリカさんと比べると、もう大変ですね、それは。

私たちは収容所を出ましたら、アメリカさんの配給がありました、その配給をもらって食べておったんです。

それから夕方になるとね、道路のそばに立つんですよ。そうするとね、兵隊さん、要するにPWといったですね。兵隊さん、要するに捕虜になった兵隊さん。この人たちが、あっちこっちの作業に行くんですね。作業に行ったら、そこからいろんなものを持つんですよ。

そして、石川の収容所の道路からこう、通っていくわけですが、そのときにね、子どもたち、その辺散らばっていますと、みんな投げるんですよ。兵隊さんたちがね、要するに。

ふんどし1本しか着けてませんけれども、どこにどう隠したか知らんですが、お菓子だとかね、いろんなものを投げてくれました。おそらくあれも、ふるさとを思ったんじゃないですかね。ちっちゃい子どもたちを見て。まあ、そんなことがありました。

11. 石川難民収容所と終戦

(1) 石川難民収容所の状態

仲本先生

そして、これから石川に行くわけですかでも、石川はですね、普通の米軍用のテントを張って、その中にたくさん押し込められていました。

そして、何かね、当時のを見ますとね、3万6,000とか8,000とかいっていますね。人間がね、その避難民がそこに。いまだと、ほら範囲も広がっていますけれども、あのころは石川の、旧石川の部落ですから、そこにもされてるんですね。だから、もうぎゅうぎゅう詰めです。寝るのも、ほんとに座って寝るような感じでしたけども。

毎日のように死ぬ、死人が出るんですね。特に子どもが多かったんですが。でも、いつも、葬式用の、葬式というもんでなくして、もう死んだ人はただ素手で担いでいくようなもんですね。

そして、石川の部落の外れに、あの、山があったんですが、そこに埋めてるんですよ。だから、それが誰であるかも全然分からん人も、たくさんいたと思います。そこで、まあ石川の。

それとね、マラリアがはやったんですね。マラリアはやって、そのマラリアで死ぬ人が多いんですよ。幸いにして私はこれにかからなかったんですが、うちの、要するにヌンドウンチ（祝女殿内）と一緒にですから、家族とは別れてますよね。

ヌンドウンチの人たちは、そのマラリアにかかることはなかったんですが、ほかの人たちはかなりかかって、それで死んだ人が多かったですね。

だいたい、その道のそばにいますとね、もう一日に5、6回か、6回か7回ぐらい、10回ぐらいですか。運ばれていく人がいました。そして、いまのように泣いてる人もいなければ、もう、ほんとに淡々としてね。表情も。そういうような運び方でした。

(続) (1) 石川難民収容所の状態

仲本先生

それからですね。その収容所といってもですね、鉄条網が張られてるんですが、その鉄条網の幅がね、わりと広いんですよ。そしてこれを開けるとね、大人でも出入りが自由にできるんですね。

で、私たちはどうしたかという、朝暗いうちから、そこを抜け出すわけです。鉄条網からね。そして、その近くにあるちり捨て場に行くんですね。そこで残飯をあさったり、それから学用品を。

私は主に学用品を集めたんですが、鉛筆とかノートですね。そういったのがある。それから残飯が一番よかったですね。はは。要するに、おなかを満たすことができましたんでね。

それもね、いま考えると大変ですよ。ドラム缶にね、コーヒーのかすと、たばこの吸い殻とか、いろんなのがあって、それに残飯を入れるわけです。

それをね、トラックの上から、ぼろぼろとこぼすんですが、それを私たちはその下へ、たかってね。その中からこうして肉類を選んで、片手に持って、肉類をこう選んで、それを食べたんですが。

まあ、すごくおいしかったですね。ははは。はい。いまだと大変なことになると思いますけど。そんな残飯をね、したり。

それから、アメリカの、兵舎へ入りますと、いろんなのがあるんですね。毛布とか、そういったのがあるんで、それを取ってくるんですね。

特に毛布は、もう一番上等でしたね。これ持ってくる人は、一番褒められたんじゃないでしょうか。毛布などは。

(続) (1) 石川難民収容所の状態

仲本先生

僕は、泥棒が、どうしたのか下手くそだったんですよ。ところが、1回だけ炊事場に入ったんですよ。炊事場にはいろんな食料がありますからね。

もう、ちょっとアメリカが、出たり入ったりするのを見計らって、ぱっと入って行って担いでくるわけですが、選ぶことはないんです。もう、あるものを手当たり次第に持っていくもんですけど。

1回入ったんですがね、さあ、砂糖とって持って、やっと担いで、そしで山の中に行くわけですが、そこで調べたら、砂糖じゃなくて塩でした。うん。非常にがっかりしましてね。

うち帰ったら、また怒られましたよ。「フラーグァーヤ」って。ばかよって怒られたんですが。まあ、そんなことがありますね。そんなことで暮らしてましたが。

11. 石川難民収容所と終戦

(2) 学校の始まり

仲本先生

ある日ね、先生がね、先生が子どもをかき集めて歩くんですよ。要するに、追っかけて捕まえるんですよね。

すると、だいたいの子は逃げているんですが、私も逃げたんですが、結局ね、子どもを捕まえて、学校連れて行って、要するに教育をするというわけですね。

で、私たちは遊んでばかりいたんですけれども、僕の友達みんな捕まって、学校連れていかれたの。そうすると遊ぶ人がいないんで、仕方ないから私もついていっていったんですが。

そしてそこで、要するに「君は何年生だ。名前は何という」なんていって、こう聞かれて、組分けするわけです。それで、私はつかまって、聞かれたときに、うそをついたんですね。ほんとは6年生ですが、「5年生です」と。

私なりに、そのころ不思議に、理由があったんですね。要するに、6年生が5年生になると力強いから、けんかまで強いと。泊校の延長ですかね、とにかくけんかが強いと。それから、学問したって僕のほうがいいんじゃないかな。要するに、1級上ですから。

それから、もう一つね、一番心配だったのは、要するに父、母に会ったときに何と答えようかと。父や母には、会ったときに、その学年を下がったら怒られるはずなんです。

それでね、この理由が面白いんですね。私なりにいまでも覚えてるんですが、うん。あのね、5年生のときにほとんど勉強してないから、うん、また下がったんだと、もっともらしい理由をつけてあったんですよ。だからおやじやおふくろと会ったときには、そう言おうと言っていました。

(続) (2) 学校の始まり

仲本先生

そのころですね、ちょっと写真にも載せてるんですが、石川の収容所はこういうような形をしていたんですね。

そのバラ線の上に、洗濯ものなんかを干しておって、そこは出入り自由だったんですね。朝で、暗いうちにそこを出て、夜、出てくるんですよ。入ってくるんですが。

そして、うちでは、何を取ってきたって言って、広げてみんなに見せるわけですね。まあ、そのころ、こう持ってきたものの名前がね、“戦果”です。

“戦果”という名前ですね。要するに、戦争の結果ということですよ。敵のものを持ってきたわけですから、戦果になりますよね。船沈めたと同じような、戦果といったんですね。

その戦果が少なかったんですよ、私は。だから、いつも怒られていたんですが、まあ、そんなことがあったりして。

それと教室もですね、いまみたいに、板とかこんなもんじゃないんですよ。ススキをこうして編んで、そして隣の教室をこう開けると、すぐ見えるんです、みんな。そうすると、隣の教室をこう開けて見たりしていましたが。

12. 城前初等学校から宮森初等学校へ

(1) 石川市城前小学校の沿革史によれば

仲本先生

私が、一番最初に行った学校が城前小学校というところですね。その城前小学校というのは、戦後教育の発祥の地といって、いまも碑が建ってるんです。戦後教育の発祥の地といってね。

こういった、ほんとに、いろんな継ぎはぎだらけで、テントとかね。僕のいるころは、まだこんなのもなかったですね。もっと悪い校舎だったと思います。

そして、そこもでき始め、学校の始まりというのは、どういふことだったろうと、沿革史を調べてみました。

城前の小学校がですね、5月10日、初代校長山内繁茂（はんも）と言ったんですがね。これはおそらく「はんも」という、ではないと思うんですが、「はんも、はんも」して私ら言ったんですが。

この人がですね、アーレンという海軍大尉より、子どもたちを集めて、幼稚園の子どもたち教育してくれんかと。要するに、これらが、ぐれていくのは怖いと。このアメリカさんは、その辺の良識はあったんですね。

集めてくれと言ったんですが、実際には4年とかね、集めて、いるうちにね、そのところは4年といっても、僕はいま、例えば5年だと言ったのは、ほんとは6年ですよ。年齢がまちまちなんですよ。年齢がまちまちなんで、結局高学年とかね、それから、中学年とか、何か決めたいみたいですね。

そして、その城前の小学校には、当然私たちみたいな、要するに1年から6年まで、それから、高等科という時代。要するに7年から8年。それから高校。要するに戦前、中学と女学校とかいた人たちも一緒にいたんです。全部。

ですが、ここには結局、小学校、高等小学校といましたよね。7年、8年の。それから高校生。要するに旧制中学生と女学生。こういった人たちが、全部一緒にごった返して入っていたんです。

12. 城前初等学校から宮森初等学校へ

(2) 終戦の日を知らない

仲本先生

私こう、隣の部屋見たときに、ちょうど、高校生の姉さん、兄さん、姉さんだっと思いましたが、そこに、先生がね、「おい、日本はもう戦争負けたんだよ。負けたんだよ」と話をしていました。そしたらね、この先生が憎いこと、憎いこと。ものすごく憎かったんですよ。顔見るのも嫌だったんですが。

おそらくね、これはね、私のあれからしまして、要するに終戦になったということじゃなくして、沖縄の戦争が負けたということじゃなかったのかなと思っております。

といいますのはね、城前小学校ができたのが5月10日ですね。それから5月、6月6日に、いまの小学校、6月9日ですか。7月9日、いまの城前小学校に移ってきてるんですね。

したがって、戦争はそこで負けたんだよと聞いたのは、結局、日本ではなくして沖縄戦だったと思います。そしてね、そこで珍しいのはですね、5月10日といいますとね、どういう日かといいますと、5月4、5日ごろ、沖縄が総反撃をしたことがあるんですよ。中部のほうで。

要するに、もう持ってる大砲とか、そういった、斬り込み隊とか、爆雷とか、みんなで総反撃をしたんです。したのが、だいたい4日か5日じゃなかったかと思うんですが。

そうすると、その後ですよ。その後には、もうすでに学校が建ってるわけですね。教育を始めてるわけです。それからすると、先生方もすごく偉いなと思います。

それから、その初代の山内という校長先生。後での話なんですけど、石川高校の記念誌に載っていましたが、最初はね、みんな危なかったそうです。命が。要するに、日本人なのに、米人教育をしてるということですね。

ちょこちょこ兵隊が山から下りてきよったんですよ。で、その人たちに殺されはせんかということですね、非常に心配したらしいんです。アメリカさんもそれは心配しておったみたいですね。

(続) (2) 終戦の日を知らない

仲本先生

そして、私が石川に行ってから、朝、バラバラバラッと銃声がするもんですから行ってみたら、兵隊がやっぱり撃たれてました。だから、山からちょこちょここと、要するに、残ってる兵隊たちが下りてきたりしましてね、危ない時期であったんですね。

そして、石川ではなかったんですが、ほかの収容所ではですね、来て、住民をサルといって殺したところもあるらしいんですね。要するに兵隊が。スパイだということで。だから、こういった兵隊も怖いんですよ。日本兵も。

まあ、そういった時代に、あれ(学校)を始めたのは、すごく偉かったなと。これはアメリカさんも、沖縄の、先生方も。いまでもそう思っています。

そして10月22日。このときはもう終戦ですよ。その学校も大きくなって膨張していますから、これを城前小学校、ここに残るもん。そのときは初等学校といったんですが、そこに残る生徒。それともう一つ、宮森初等学校へ行く人。それから、石川高等学校に行く人。こう分けて、そこで分校式を行っております。分校式ですね。これが10月の22日ですね。

13. 宮森初等学校時代

■ 学校の様子

仲本先生

分校式が行われたときは、私いました、そこで。その式に出席しましたので、それから宮森に行くわけです、私は。

そして、その辺がですね、6月1日から学校分離までの教員数ですね。記念誌に載ってるものを見ますとですね、6、80名ぐらいいるんですね。その人たちは、教員の免許持ってるんじゃないかって、中学校を卒業したり、要するにインテリの連中ですね。この当時の。

そしてしかも、ある心配をしながら。要するに、殺されはせんかなと。要するに、スパイだといってね。アメリカ教育をしてるんだと。殺されはしないかなといいながら、そこに集まった先生ですよ。だから、この人たちもすごく偉い人たちだったなと思っております。

その記念誌から見ると、6月1日から学校分離までの、要するに10月22日ですか。その辺までに発令された先生が80名と、私が計算したら、勘定したらおりました。

だから、これは大変なことだったろうなあと。当然、給料なんかありませんよね。まあ、こんなところで教育をしようと、したわけです。

そして私は、そっから分校式をしまして宮森小学校へ行きます。宮森小学校へ行きましたらね、まずテントの、要するに米軍のテント、すぐストレートな米軍のテントそのままですね。何もつくられてない。そして、その下にわれわれは吠（かます）を敷いて、地べたに座って勉強するわけですが、机もない。机は自分でつくるんですね。

例えば、テックスと呼んでおったボードですか。紙みたいなやつ。これですね、私はこれぐらいの机をつくったんですよ。座って、こう勉強ができるようにね。これぐらいのをつくって、これを毎日担いで、学校へ行くんですが。

(続) ■ 学校の様子

仲本先生

そしてね、やっぱり当時の先生方は、やっぱり集団登校というのをやっておりますね、全部集団で、こう行くんですよ。そうすると、その集団で行きながら、班長さんがおって、歌を歌いながら行くんですが、その歌が面白いんですね。

ここに書いてありますが、「♪ 青空仰いで／大きな呼吸／みんなそろって／この胸張って／いつもいつも／クアーシ又配給マチカンティー」と。お菓子の配給を待ち望んでいるという歌をつくってですね、歌いながら学校へ行くんですね。これは元歌が何だったかは、分かりませんが、とにかくそういった歌で、学校行きました。

お菓子の配給があるんで、その日だけは何があっても必ず出席するということですね。チョコレートなんかが多かったような気がします。

そして、宮森小学校というのが、結局、2番目の学校に、戦後の、終戦後の2番目の学校ですが、その1番目の学校ですね。いまも、この城前小学校というのがありましてですね、そこには、教育発祥の地、戦後教育発祥の地という碑が建っております。

だから結局、沖縄県で戦後、一番最初の教育を始めたのはこちらだろう、だろうと、と思われまして。そういった碑が建っております。これも写真に載っておりますけれども、そんなことですね。

それから宮森小学校行きましたら、いまみたいな校舎は、ストレートの米軍のテント。それから、机、腰掛けもなしということでしたんで、そこで地べたに座って勉強するんですが。

(続) ■ 学校の様子

仲本先生

あのね、黒板ってあんな黒板なくて、ベニヤ板に黒いペンキを塗ったもので、消しても消えないんです。ただ、黒いペンキを塗っただけ。そしたらチョークもね、こんなに太い、これぐらいした、あれは何用ですかね。こんなチョークがあったんですよ。直径3センチぐらいしてるチョークがね。これで先生は字を書いて教えていました。

まあ、こんな状態、宮森小学校では。そしてやっぱり、1級下がってますんでね、けんかは強いしね、相撲も強いしですね、大変楽しみでした。親はいないけど。

といたしますのはね、当時はまだ、男女共学じゃなくして、男性の教室、女性の教室、分かれていました。例えば、5年1組ですと、5年1組の男性、5年2組の男性と。そうすると体育の時間になると、両方集めてきて相撲取りさせるんですよ。江戸相撲ですけども。

一列に並んで、小さいほうからこう行くわけですね。私、中ごろから出るんですよ。やっぱり強いんですよ。全部負かしちゃって。向こうの一番上まで。そして、先生困っちゃって、よし、じゃあ、おまえ自分のクラスと戦いなさいといって、要するに僕の次の人から、また、やったんですけども。

まあ、そういうふうにして、どっちかというとやんちゃ坊主で、やったんですね。ボスみたいに歩いとったですね。

あ、そして僕、泊国民学校にいるころまでは、一番弱いほうなんですよね。精神的にも。勝つと思っても、いつも負けてる。そういった状態で、けんかができないと。

14. 家族と一緒に暮らせるようになる

(1) 昭和21年8月に山田村に帰ることが許された

仲本先生

昭和21年の8月になってですね、山田の村に帰れることになったんですね。要するに、あちこちの収容所からみんな集まって、自分の部落に帰ってきたんですよ。

そしたら、そこで、結局、家族と一緒にあって、私は、そこで合流するわけですけども、ほんとの意味で、その辺で、家族らしいのに会うわけですけども。

そこもまだ、またね、ヌドウンチ（祝女殿内）と一緒になんですよ。そのヌドウンチとね。実家と母。おやじは帰ってないですが。

14. 家族と一緒に暮らせるようになる

(2) 父の消息を探す

仲本先生

ちょっと言い忘れてましたけれども、おやじはですね、当時、石川のところで、毎日、ではないでしょうけれども、2、3日に1回ぐらい、要するに、屋嘉部落といって兵隊が収容されてるところ。兵隊とか防衛隊とか、そういった人たちが収容されたところで、氏名を書いて、いまあちらに収容された人は誰ですと、名前を発表するんですよ。

そしてそのとき、私はいつも行ってました、聞きに。おやじはいないかな、いないかな。夕方になると、いなかったって、今日もいなかったって、しょんぼりして帰ってきたんですが。まあ、そんなことがありましたね。

でも、山田に行って、結局、みんな一緒になることができたんですね。

それはよかったんですが、やっぱりものさ、残飯探しはあるんですよ。山田の近くにちり捨て場がありましてね、やっぱりドラム缶からぼろぼろと、こうこぼすのがあって、その肉を拾って食べたりしたんですが。

それから、よく浜辺を歩いたですね、冬は。浜辺を歩きますとね、水が冷えて、魚が泳げなくなって、そこによ、打ち寄せられてくるのがいたんですね。そんなものを食べるとか。

それから、私のうちはですね、ドラム缶の、コールトールの入ったドラム缶。これの空き缶になったやつは、中がコールトール付いてますよね。これを延ばしましてね、トタンみたいににして。それを壁に張ってあったんですよ。そうすると、このままですると着物汚れますから、うちから今度は、アメリカの兵舎のテントを持ってきて、テントのカバーで内壁をつくってあったんです。

そうすると、その棧（さん）がありましてね。その棧をネズミが歩くんですよ。そうすると、このテントからね、ネズミが歩いているのが分かるわけ。うん。こうしてね。そら食料だといって、こうやって捕まえて。そして、頭の近辺をこうつぶして、落とすと、結局、床下に落ちるわけですね。また、床下に入って、これを取ってくるんですが。これが食事になるわけです。ネズミはそういうふうにして、たくさん食べました。

(続) (2) 父の消息を探す

仲本先生

それから、セミ、メジロとかね。もうとにかく、ありとあらゆるもんですね。バッタとかも、食べられるのはすべて食べました。焼いて。ええ。その中でも、やっぱり、ネズミはいいごちそうでしたね。ええ。

それと、うちでね、ウサギを養っておったんです。ウサギはもう一番、肉類を供給するのは上等ですね。要するに、毎月生むんですよ。子どもを、毎月。ですからこれを、特に弟がウサギを飼って、私はニワトリを飼って、そういったものをつぶして食べたりしていましたが。

それから、弟はブタも飼ってましたね。300斤といますからね、相当、大きなブタですね。300斤というと何キロになりますかな。200キロぐらいになりますかな。300斤のブタを大きくして、それを、売ったこともあります。まあ、そんなことで、山田で暮らしていました。

14. 家族と一緒に暮らせるようになる

(3) 蘇鉄地獄

仲本先生

それでもやっぱり食べるのだから、ソテツを食べるんですよ。ソテツをね。そのソテツというのは、こうして大きな幹があって、それから、子どもがこう出てくるんですけども、この子どものほうですね。ここは柔らかくて、すり鉢でこうするにも簡単に、わりと軟らかく、すれるんです。

その代わりに、ソテツには毒があるんですよ。このソテツを採ってきて、その皮まで、はいでですね、皮を取って、それをいくつか切って、漬けるわけですよ、水に。2、3日漬けて、結局、毒抜きでしょうね。それをすりましてね。すって、そして、洗って、搾って、でんぷんを取ると。

それから搾ったかす、要するに、おからみたいなやつがありますよね。なっていますから、それを取って、こう卵みたいに丸くして、石垣の上とか、そんなところに干すんですよ。そうすると、しばらくたつと、ものすごく臭いんですよ、あれ。発酵するんでしょうね。これで結局、毒が消えるんじゃないかなと思うんですが。発酵して臭いんですが、こういったのが食料になるんです。

だから、取ったでんぷんはですね、もうほんとにお祝いとか何とかのときに、機械油で天ぷらに焼いて食べるんですよ。機械油で。機械油は消化しないので、全部出てくるんですよ。パンツはまあ、いつも真っ黄色ですね。あれ食べると。うん。そんな時代。

それから、そうすると次は何食べるかというと、これはもう、いつもは食べられませんので、あのでんぷんは。この搾りかす、搾りかすを、結局発酵して、もう臭く、からからに乾いたやつを、臼で、こうつくわけですよ。すると粉にして。

(続) (3) 蘇鉄地獄

仲本先生

で、あのヌンドウンチ(祝女殿内)はですね、そのころ9名か10名ぐらいの家族ですが、結局ね、米1合をこれ入れるんですよ。こんな大きな鍋でしたが、米1合。あと、全部、このかすです。かすを入れておじやにして、ツワブキがありますね。ツワブキをちぎって入れるんですね。かすらが、まだあんまりないんですよ、そのころ。ないんで、そのツワブキとか、クワの葉っぱなどを入れて、おじやにするわけです。

そして、9名家族でしたから、9つちっちゃなイモを入れるんですね。これ一つでも間違うと、あと大げんかですよ。ええ。一つずつ。

で、だしがないんで、どうするかというと、このだ円形をしたね、サバ缶があります。あの、味のついてないの。それを一つ入れるんですね。そしてかき混ぜて、これでだしにするんですが、それを、まあ、4杯も5杯も食べるわけですね。ええ。

ですから、当時の子どもというの、われわれは、おなかだけはこんなに大きくして、手足はこんな細くして、ええ。まあ、ほら、最近で、よく新聞とか写真で見たような、ベトナムでね、戦災に遭ってる、あの子どもたちなんか、あれらもやっぱりこんなしてますよね。

食料はなしで、おなかだけ大きくして、手足が。まあ、こういった戦地の、戦場の子どもたちみたいに、私たちがそういうような体形でした。

14. 家族と一緒に暮らせるようになる

(4) 山田小学校開校 山田小学校創立百周年誌を見ると

仲本先生

山田小学校は、結局、われわれが山田に移動していったときに、すぐ始めようという、先生がおりましてね。そこで、山田小学校のね、創立100周年記念誌を見たんですが、9月1日から学校を始めていますね。8月になって、山田に移動が認められたんですが、9月1日はすぐ学校を始めてるんです。

その当時ですね、古い校舎が、要するに、戦前の校舎が1つ残っておって、それをみんな、床も全部取っ払ってですね、モータープールにしてあったんですよ。米軍が。

そのモータープールにしてるのを、そのまま。それから、村の人たちが出て、かやぶき校舎をつくったんですが、それが学校の始まりでした。

机、腰掛けも全部自分たちで。そして、いまみたいに、この一人掛けじゃなくして、ベンチみたいな、二人掛ける用のがつくりやすかったんで、男の先生も女の先生もみんな一緒に、それから生徒も一緒になってつくって。下級生からこうしてね、だんだんそろえていったんですよ。これが山田小学校のあれですね。

そして、そのときに私、何年になっておったかという、6年生ですよ。要するに、石川でうそついてますから、6年生。そしてね、22年ですか。22年の3月に卒業するわけですが、私は卒業しないんですよ。3月の26日に卒業生、1回目の卒業式をしてるんですが、私は6年生におったんですね。

15. 飛び級して高等学校に入学

仲本先生

そのころね、ちょうどおふくろが、そこの教員になっておったんですね。そうすると、メンツの問題もあるんでしょう。いま考えると。うん。これは年はね、7年生の、該当者だと。

でも6年生にいるから、君はもう、高校受験の資格がある。だから、おまえ受験しなさいと。あのころはですね、7年、8年から受験できたんです、高校のね。6年におってはできんから、おまえできなさいとって、いつもけんかばかりしましてね。

ある先生が「おい、どうでもいいから、とにかく勉強すればいいんじゃないか」とって、慰めてくれたんだよ。そして、「うちにも来いよ」とって言うてくれたので、ああ、どうせ落ちたってのもともとだから、行こうかなとって、結局、決めたんです。すると先生は、急いで願書を書いたみたいですね。

それからはもう、この先生はね、来てじきから課外授業していました。ええ。そして、山田の村はですね、ほかの恩納村の村に比べてですね、高校生が多かったんですよ。それは一番来てじきから、すぐ勉強を始めていましたから。

そのほかのところは、いまごろ高校に行かすかとか、女の子なんか、女の子が高校行くかなんていってね、行かさないところも多かったんですが、山田だけは、この先生が、行かさんというところも、うちに掛け合ってますね、たくさんの受験生抱えておったんですが。

そしてずっと、夜、日が暮れるまで受験勉強をし、それから、夜は「おい、おまえはこっち来い」とって、2人か3名、3名ですね。3名呼ばれまして、そこでもう一生懸命教えられたんですよ、ん。

そうすると、当時、僕は分数も分からんぐらいでしたから、これをね、教えるのは、ほんと先生大変だったろうと思うんですがね、みんなきれいに教えてくれてですね。結局、私は行きたくなかったんだけど、結局、受験をしたんですね。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

戦中・戦後の子どもの視点からのオーラルヒストリー 仲本實氏